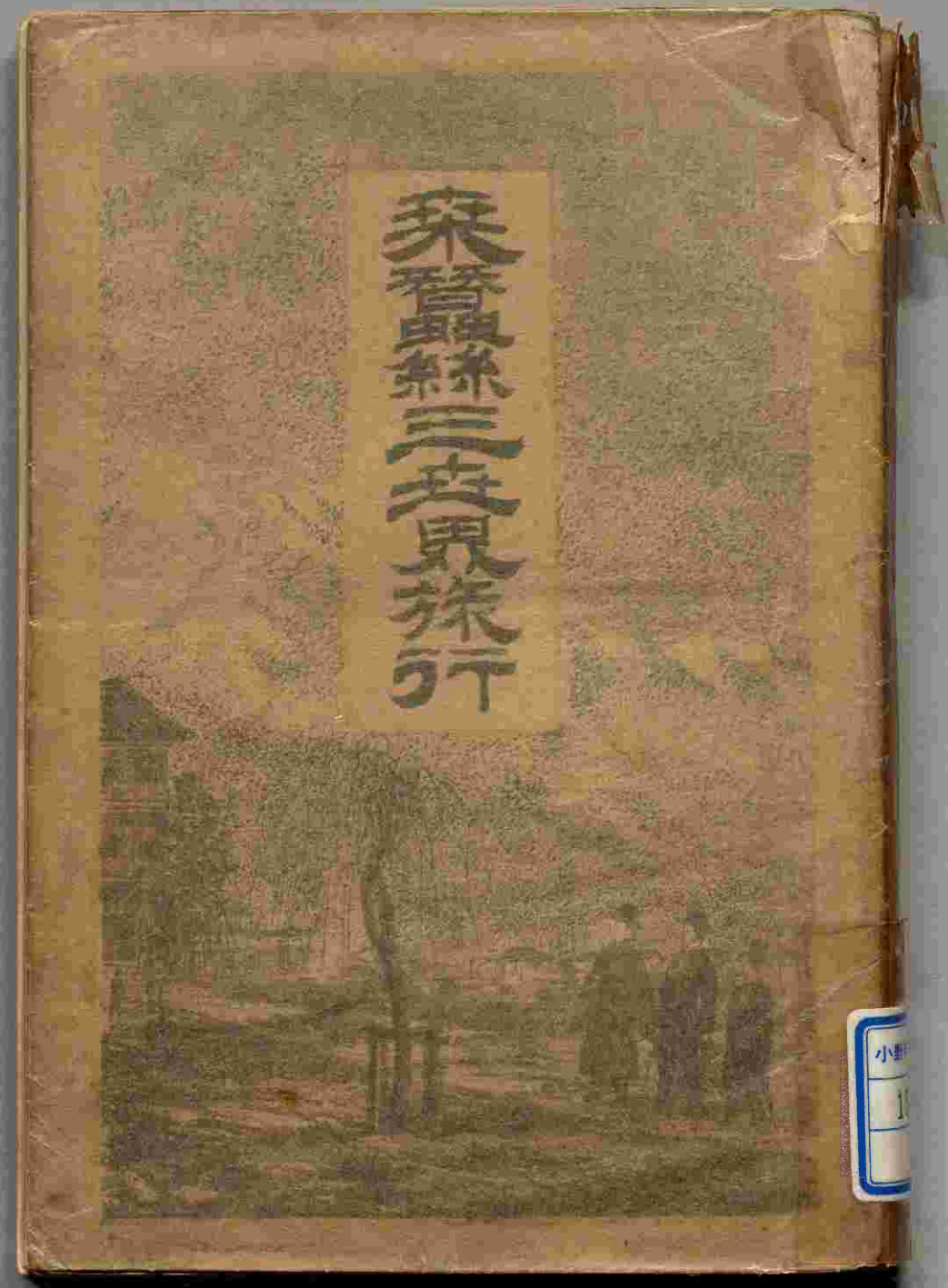


Kodak Color Control Patches

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
A 1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19								



桑野園集三卷異株下

小冊
1



木村知治著

桂洲筆

葉蠶絲三壺界旅行記

福島 進振堂發行

序

社會ノ進化ヲ導クノ要具ハ鮮カラズト雖モ人ノ思想
ヲ高メ情愛ヲ厚クスルヨリ偉ナルハナシ人ノ思想ト
情愛ハ彼處ニ漫遊シ此處ニ巡回シ以テ土地ノ人情風
土商業工業農業就中國有物産ヲ蕃殖セシムルノ方便
ヲ考フルヲ以テ第一トス然ルニ此頃頻リニ人情小説
ヲ出版スト雖モ未タ實利主義ノ小説更ニナク爲メニ
社會ニ頭ヲ出サヅル女子ナリ世ヲ漫遊スル事ナキ井
蛙ノ人ハ彼レノ情ヲ知ラス此ノ事ヲ通セズ彼我相隔

絶シ甚タシキハ鐵道瀛車ノ便モ何レノ港ハ何レニア
ルヤ何々ノ商業ハ何處ニ適スルヤ此等ノ術ハ如何ニ
ス可キヤ前途ノ目的ノミナラズ眼前ノ利益モ知ラズ
シテ困究愚蒙ニ陥リ己レ一身ハ兎ニ角社會ノ進化ヲ
妨害スル等實ニ遺憾至極ノ至ナラズヤ此等ノ意アル
ヤ我親愛ナル木村知治君ニハ小説體ノ好書ヲ著作シ
間接ニ實利的ノ有様ヲ人ニ知ラシメント快樂ニ活潑
ニ筆ヲ採リ殊ニ我國第一ノ物産タル養蠶製絲ノ術等
ヲ演說體ニ會議々事體ニ談話體ニ種々様々ニ綴リ看

客ヲシテ人々厭カシメズ其功偉大ナル哉予此レヲ贊
成シテ序文ニ送ル

東京芝

明治二十一年四月上旬

風花堂主人

木村知治足下

緒言

本書は蠶業なり教育あり實利上の事を記して婦女子等の未だ世上の
景況を餘り知らざるものに頗ち與へんとの主義故に活版に付したし
と書店より申し請ふに由り此れと能く訂正して授けんとするに際し
他に出來し事ありて止むを得ず唯其儘書店に渡したり依て著者の意
に合はざる處あるも知る可らず然れども第二版にハ充分訂正するの
見込なりき

著者識

通俗桑蠶絲三世界旅行記

目録

桑の世界の段	一丁
三人旅行せんと物語の段	四丁
三人九州に出發の段	七丁
船中にて美人に物語る段	十二丁
兵庫縣巡回の段	十七丁
播磨國神東郡宿の段	三十二丁
岡山縣巡回の段	四十六丁
廣島縣巡回中妹に邂逅する段	五十三丁

廣島にて演説の段	五十八丁
大分にて幻燈會を催す段	六十五丁
土佐及伊豫巡回の段	七十三丁
女子養蠶會質問會	九十二丁
淡路洲本にて幻燈會の段	九十八丁
攝津有馬遊の段	百五丁
大坂に遊ぶの段	百十四丁
京都府下巡回の段	百二十二丁
滋賀縣巡回の段	百二十五丁
美濃信濃兩國漫遊の段	百三十二丁

尾張三河兩國巡回の段	百四十三丁
駿甲漫遊の段	百四十六丁
横濱の紀事	百四十八丁
三縣遊歴の段	百五十四丁
奥羽巡回第一の段	百五十九丁
奥羽巡回第二の段	百六十四丁
越後の紀事	百七十二丁
摘桑妹を招くの段	百七十八丁
摘桑氏細君と妹と物語の段	百八十二丁
摘桑高木等集會の段	百八十四丁

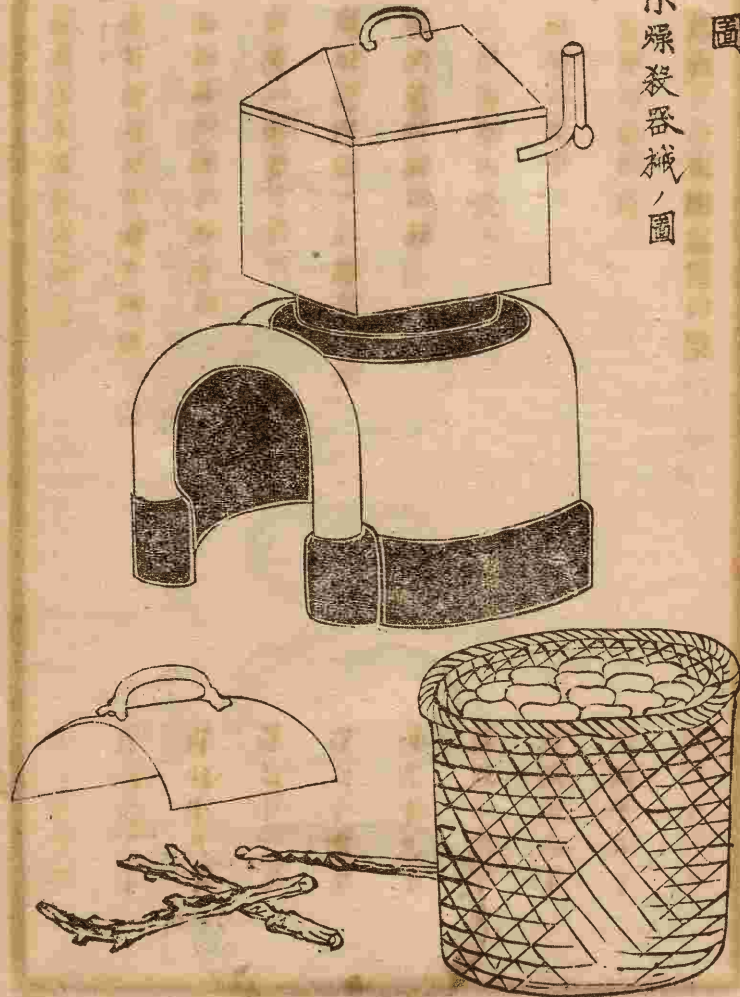
通 俗 桑 蠶 絲 三 世 界 旅 行 記 目 錄 終

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

百一十下
 百六十二下
 百六十八下
 百六十九下
 百七十下
 百七十一下
 百七十二下
 百七十三下
 百七十四下
 百七十五下
 百七十六下
 百七十七下
 百七十八下
 百七十九下
 百八十下

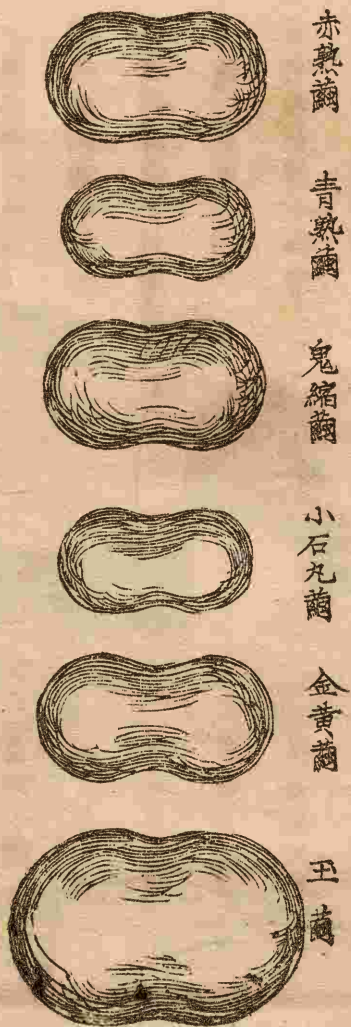
第 一 圖

小 燥 殺 器 械 圖





第二圖



赤熟菌

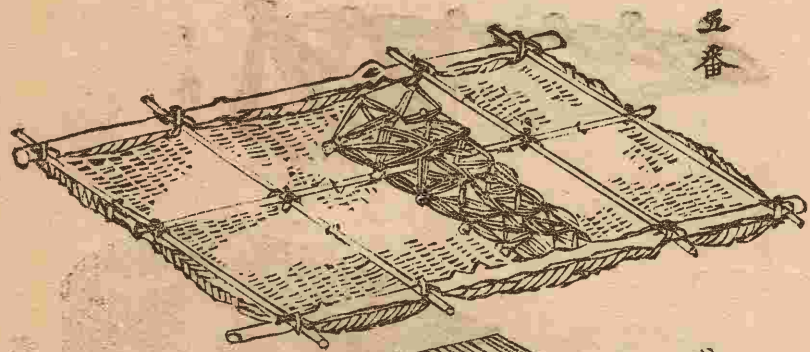
青熟菌

鬼縮菌

小石丸菌

金黃菌

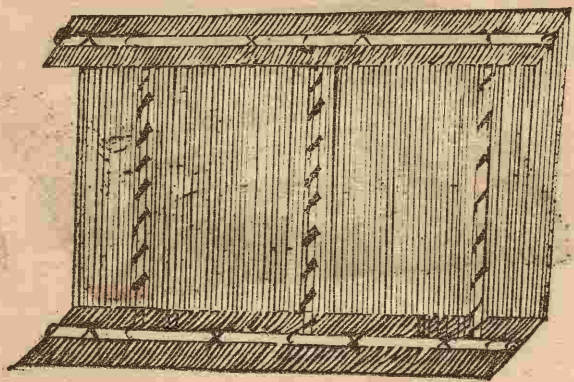
玉菌



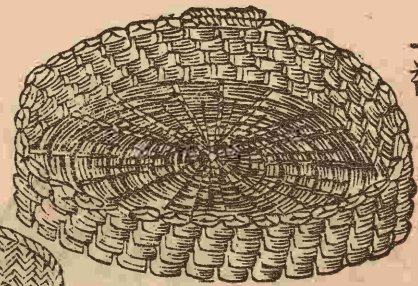
五番



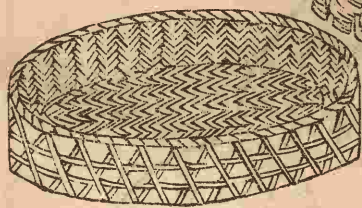
八番



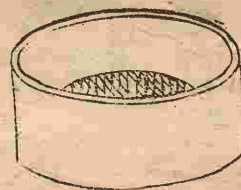
五番



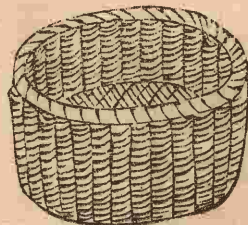
一番



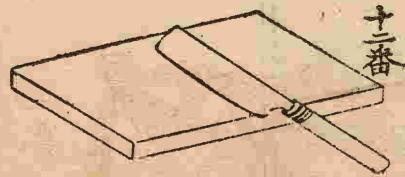
二番



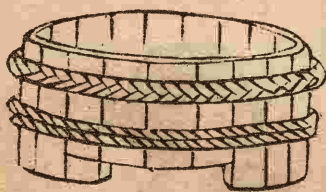
三番



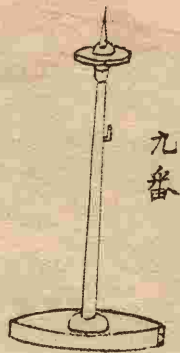
四番



十二番



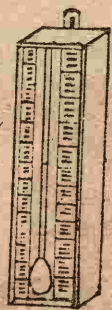
十一番



九番

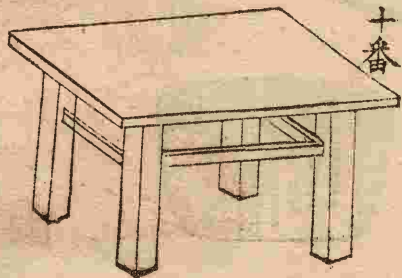


十三番

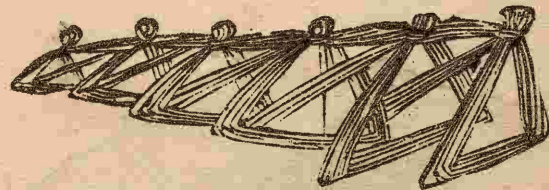


華氏十九ヲ以テ百十度トス

十四番



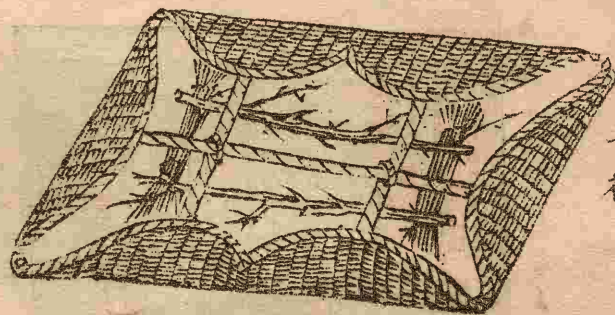
十番



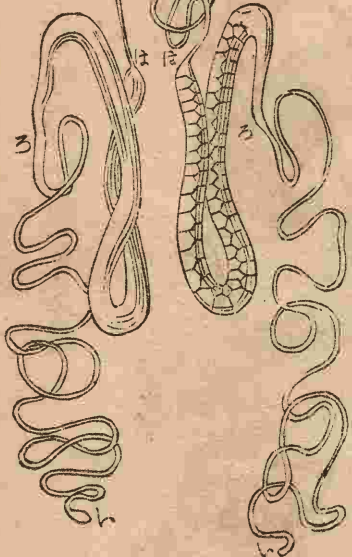
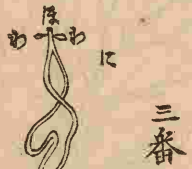
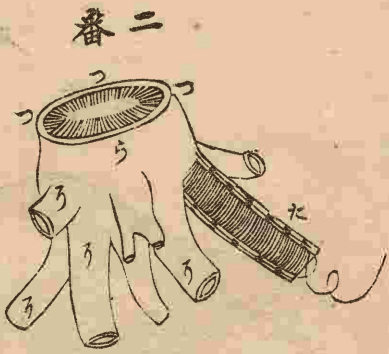
五番



六番



七番



第五

蛭蚕ヲミテ繭ヲ造
ラニム圖



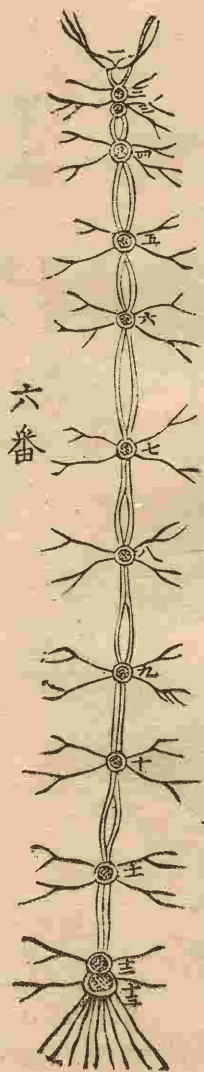
三第



自然桑ヲ以テ野外ニ飼育スル圖

四第

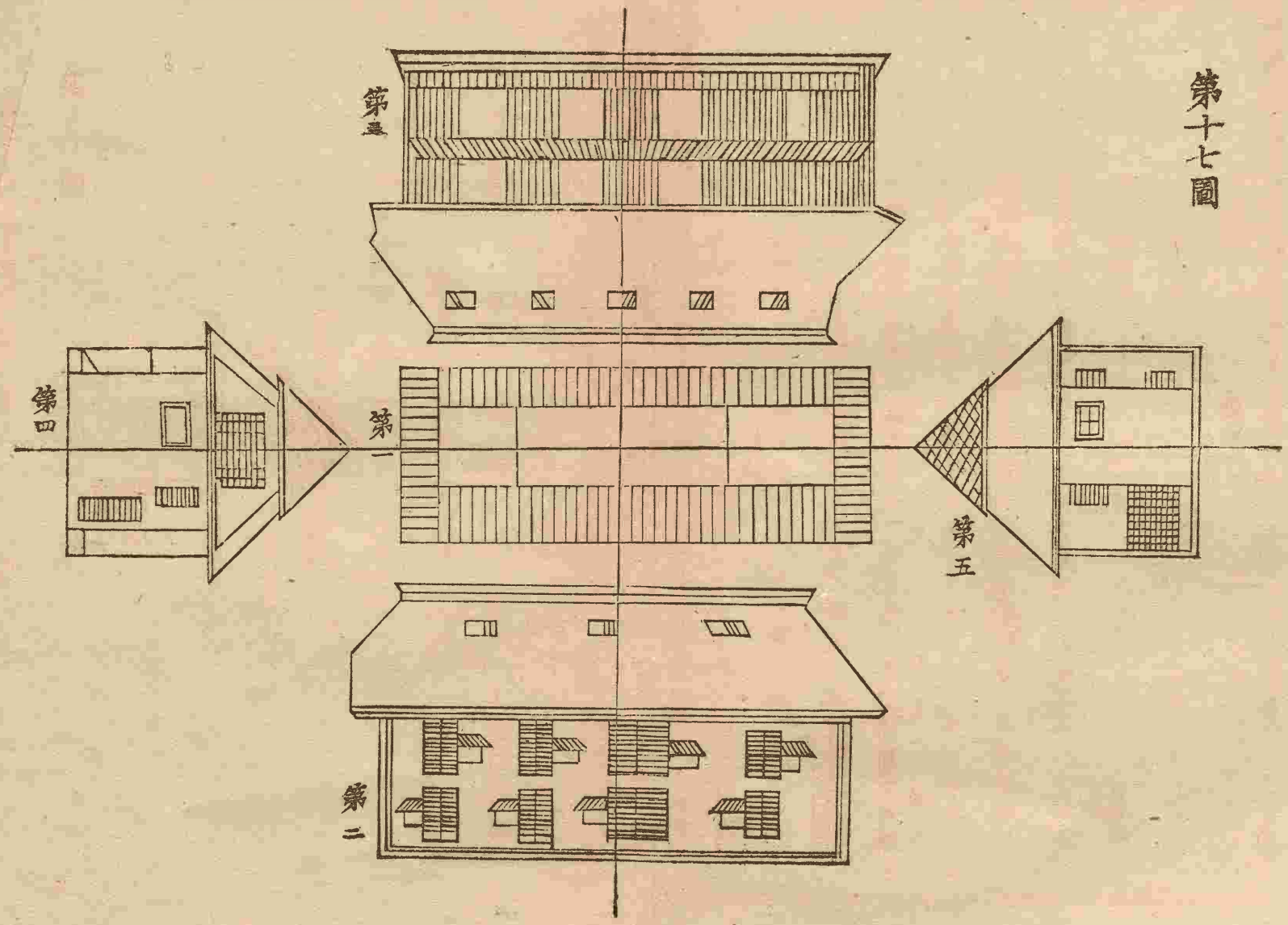




六番



第十七圖



六番



通桑蠶絲三世界旅行記

兵庫縣 實業主義著

桑の世界の段

世界せかいの廣ひろく萬國ばんこくは多おほしどい福澤先生ふくさくせんの世界國盡せかいこくじんの筆始ふではじめめ
あるか如何いかにも多おほしと見みへて頭あたまの丸まるい髪かみの無ない坊主ぼんずさん
連れんか御好お好き遊あそばさるゝ處ところの書物しよぶつに三さん千世界せんせかいとなん見みへ
たれば随分すいぶん世界せかいは多おほくあるものと驚おどろき果はてたるに三千世
界せかいどころか此頃このころの那處かしこにも二階にがい此處こゝにも三階さんがい四階よんがいと増まし
其外そのほかには教育世界きよいくせかいとか政治世界せいぢせかいとか農業世界のうぎよせかいとか博物世
界ぶつぶつせかいとか動物世界どうぶつせかいとか植物しよぶつとか礦物こうぶつとか又また哲學世界てうがくせかいとか藝げい

者しや社しゃ界かいどか娼妓しやうき世界かいどか別嬪べっぴん社會かいどか何なんどか蚊かどか云いふ
事ことう大流行おほいはやのなるか此兆子てふしでは三千世界さんせんかいか一萬世界いちまんかいにもな
るならんと思おもふて居ゐる處ところ又候また増ましたは此頃このころ無暗むやみ矢鱈やたらに躁さわ
て居ゐる桑まの世界かいと蠶かいの世界かいと絲いとの世界かいとなり此三世界さんかいは
恰あたも月世界つきかいと太陽世界たいやうかいと我々人間われわれにんげんう臥起ねおきする世界かいと聯絡れんらく
して夜よとなり晝ひるとなり春はるとなり夏なつとなり秋あきとなり又冬ふゆと
なりて再び春はるに回かいは草くさは萌黃もへぎの絨じしきを敷しき柳やなぎは霞かすみの衣ころもを
縫ぬひ花はなは笑わらふに夏なつと移うつり秋あきと代かは月つきは嘯ささき虫むしの鳴なき人
として快樂くわいらくに世よを送おくらしめたる上に食くふものやら衣きるも
のやら住すむ處ところを恵めぐみ與あたへて益えきを得うるか如ごとく桑まの世界かいと蠶かい

本文ヲ讀テ桑ニ適
シル土地ヲ味フヘ

の世界かいひの相牽引あひけんいん一又蠶かいの世界かいと糸いとの世界かいも相通あひし三界さんかい
鼎立ていりつして始めて用もちを便たするものなれば何れの一世界かいを棄す
て旅行りょこうせざるときも何れの一世界かいを見物けんぶつせざるも其一いちと
欠かくときの鼎立ていりつの一足かずを欠かきしと同おなしく決かして用もちをなす
能あたはざるなり然しかれども何れの世界かいより旅行りょこうせんと尋たづぬれ
る必ず桑まの世界かいより始はめざるべからず此この桑まの世界かいの何
れにありと云いふ太陽光線たいやうくわんせんに餘あまり遠とほからず又近ちかからず其
中なかを得えたる温帶おんたいどか暖帶だんたいどか云いふ處ところにして其方角そのかたかくの地球ちきゅう
の中央ちゆうおうに向むかひ一方いっぽうの地中ちちゆうと隔へて肥料世界ひりょうかいに隣となり一方いっぽうは空
氣海きかいを隔へて光線世界くわんせんかいに相望あひまむなり此これより次章たぎの高木たかき

四
郎と荊桑次郎と摘桑三郎の三人にて此の桑の世界を旅行せんと物語りする段を記せんとするものなり

三人旅行せんと物語りの段

今寒中にて別に多忙にもなければ三人連れで旅行せんと約するに先づ高木太郎の一禮をなして荊桑三郎に問ふ失敬ながら君の何處の生にして當時何處に居住せらるゝや荊桑次郎答て言ふハイ私の先祖の我日本の西の陞より海路三百里を越へて支那と云ふ土地にて生れしものなるかろれより九代目にて年は三百四十三と重ねたり然るに小生の今年十一年にして漸々十八並のものとなり弟の三

支那ヨリ渡リシ桑ヲ知ルニ足ル

才にして始めて養蠶學校に入學を致しまた而して我父の代迄の信州松本の近在に居りたれとも父か分家を致し今の上野國富岡の近在に移り居りますと云ふに高木には又摘桑三郎に君の御先祖の日本なる由大略御履歴を承りたしと問へり摘桑三郎云ふ君の無暗に人の履歴を聞く餘り失敬にあらずやと慍を含み先づ君の履歴を語る可しと口頭を尖らし語高かりしに高木緩漫として小生の先祖は荊桑君と同じく支那の南京を去ること三十五里の村落に生れ今より三百年程前に日本に渡り來たり而して唯今は岩代國伊達郡に住みて親類も随分多くあります扱て小生

南京近傍ノ桑ナル事ト共ニ年代亡知ルヘシ

丹波産ノ桑

の履歴は大略斯の如くなれば何卒摘桑君にも一寸語り給へかし別に何にもするにあらざれども旅路に御道行申すに付ての兼て承り居かされば此頃の矢鱈に諸處の蠶業家とか業商科とかい來て質問することなれば君の御不在の節は代理に答辨をすることもあればなり摘桑良し事か分りました前言の失禮偕て小生の御存の通り八代前に丹波木といふ人か丹波に生れ其後氷上郡なり但馬の奥隈山なりに彼此致し漸く今は朝來郡に住て居りますすそれでは三人共に略ぼ心か知れ合ひたる故に此より愉快に活潑に遊歴を致し農業あり蠶業なり教育なり社會に必要のことと

實況ナリ蠶業二人
氣ノ向フル知ルニ
足ル

演説致しまじよう何れより足と出さんか如何かと摘桑答て言ふ此節青森縣やら東海道中の三重縣愛知縣なり千葉縣なり又兵庫縣なり四國九州より招待致したき旨農商科より或は人民縣會議員等より電報やら郵便にて請求あれは先づ暖なる九州に向て出發し退て東北に進まんと致します諸君如何かと語れの皆賛成とてそれでは明十七日に出せんと三人約して各々行装の用意ありたり

三人九州に出發の段

三人か斯く約せしは東京農商務省所轄蠶病試験所での事ありしが三人は路金と着物と道中日記に供する冊子と本

新橋ステーション
ヲ發ス

村知治編述する所の實地應用養蠶書蠶絲業全書與羽大家
問答桑樹全書等を柳行李に納め外に蠶業に關する蓄と摸
寫したる寫真と幻燈器械を携へて新橋のステーションを
發せしり午前九時十分にして横濱蓬萊舎に投じ彼此する
間に十一時に時移れば麥酒と折箱を拵へ手代の案内にて
輕船を浮べ山城丸の中等客室に塔したるの十一時三十五
分にして場を調へ行李を積み唯繻くものは東京にて納め
し實地應用蠶業書かり斯く兎や角する間に瀛笛數聲十二
時の時計と共に纜と解き漸く房州の沖と的として出發し
ぬれば三人の各其身上に付き大議論を出す其語に曰く摘

摘桑刈桑高木桑ノ
三種何レカ給アル
ヤ又何レノ土地ニ
ハ何レヲ用非ルヲ
風シトスルヤ否ヤ
ヲ味フヘシ

桑君君に向て報告すへきことあり何卒我田に水を引くと
云ふ譯にはあられども趣義を改革し給へ君の不利益な
ることを駁すべし第一拙者等は他の植物の日蔭にのみなら
ざるに君の高く大けくして他の植物を日蔭よなし大に害
を與ふるなり第二拙者の毎年枝葉共に一洗して新枝に葉
を生するなれば蠶にの甚た愛せられ比較的に大に其量多
きに君は常に幹と枝許り大けくして小さき葉を出し我一
本と一本なれの葉量多きも比較的に少くして蠶兒にさへ
好まれず第三體大けく故に田地に適せず譬ひ田地に住居
するも壹反歩に八九十本に止まるか如しと雖ども我輩の

一反歩ノ桑ハ五百七十五本ナリ

十

通常は五百七十五本にして早桑ハ四百五十本晩桑ハ七八百本も住むことを得るなり故に壹反歩の比較をすれば少量なれば急に改良すべしと語れハ摘桑答て言ふ君ハ拙者の失を非常に擧げるなれば我も亦君の失を擧げん君ハ肥田良畑ひでんりょうたんにあらされハ成長する能はずと雖も小生は畑になくとも田になくも山麓さんろくなり田畑の埒なりに成長して用をなすなり次に君の住居の下には間作まさくとて麥あり茶なりと作る能はずと雖も我樹の下には何なりとも間作するを得るあり次に君は根際ねさわか土に近き故に葉に泥どろを帯びるとありと雖も小生は斯る患はあきなりと喃々なんなん未だ言語終

三種ノ一得一失能ク味フヘシ

高木仕立ハ岩代ニ多ク摘桑ハ但馬山形ニ多シ

らさるに高木には仲裁ちんさいをあして曰く兩君等の如く議論するときは尙亦苜桑君にも言ふとあり何ぞや摘桑君は河邊の砂土さつちには洪水こうすいの爲めに漂かさるゝとあれども苜桑は洪水と見れば其地際より苜去れば其患なく又苜桑となしたる新抄しんせうは薪まきとなり紙となる可し然らば岩代福島の竹内某が製し升れば摘桑君には小生は蟲害の難は少なけれども苜桑君にハ多しと斯く御互に失を擧れば極りなき故に折衷して余に賛成さんせいなし玉へ小生は砂の難もなく新抄も用となり蠶かにも其業と愛せられ又風の難もなく洪水の難もなくと云ふや未だ言盡さざるに船中の童兒わらわ夜飯と進む因て食し

十一

終りて甲板がっはんに登れば相摸灘さがりなだにて波穩なみだまに平陸ひらりくを行くか如し

船中にて美人に物語る段

斯く甲板がっはん上に才立てりりつすること數時間なれば身凜烈みりんれつ寒肌かんはだを刺す因て甲板がっはんと下れば最早夜十時にして人靜かに唯濤とらう々車の轆れきする聲のみ何か旅の空うきものにて古郷ふるさとの妻子おとこと想ふ折柄をりから女子おんなの艶あざしげなる語にてアナタと呼ぶより臂枕ひびきくらを脱し頭あたまと擧あぐれり左の手に瓶びんを携へ右の手に盃さかづきを持て一杯如何かと柔和なる手を出し顔かほに靨おぼろを顯あらわはし眉まゆの濃こくにしていとやさしげなれば此れ有りがたくと杯を受け楮かて不調ふてう法ほうなからアナタは何誰どなたでありますと尋ねれば赤熟あかじやくのオテ

つと申しまして横濱より我主人に連れられ歸りましたなれども何分女の身ゆへ誰便たれたよりにするものもなきにアナタ方の私共の命の種なる御方許おんかたへり御捕故おんつかひに御談を承り度と存し忝かたじけなく上いたしましたと物語れり三人等一統いつとうに口を揃へてイヤハヤ能々御出になりましたゆると御談おん談あられませ尙一兩日も同船なれば緩ゆるるゝ御談致おん談しましよふと約して各眠に就きしに何か枕の邊に女の聲立ちぬれば眠ねむりを寤さし頭を回せば早うと呼ぶに昨夜の美人にて皆顔を洗あらひ口を嗽すき團樂だんらく四人相向合ふて桑の談に移り朝食も忘れ將に十時に垂んとす今其談話を記すすれの概ね左の如きなり

蠶兒ノ厭フ桑ヲ相
像ス可シ

高木曰くテフ女子アナタは社會立ちで我々社會のことを
何と評して居りますかテフ女曰く妾の社會で高木氏の如
く桑に潤味じゆんみを含み昔々として和あるものを我々社會に恵
與おと下さる故に誰モ御恩澤おんせきを思はぬものゝあらされとも唯
困るにハ時々小虫の宿りしものやら非常に大なるものや
ら甚しきハ其枝の着さ一葉やら又一時に纏めて上より壓あつ
せられるやら大に難儀と致すことありますと縷々述ふれ
ハ摘桑問ふて曰く我々社會のことを何と申して居ります
かテフ女曰く摘桑君の方は失禮ながら餘り能く申しませ
んなれども泥の付きしものなり肥料の臭氣しうきあるものは少

船次ノ岬ニ近ク

養蠶書ノ批評

くありますと答へ語未だ盡きさるにテフ女主人に招れ我
室に歸りたれば三人共晝飯を兼て朝飯を食し甲板に登れ
ば紀州沙きしゅうさの岬みさきに近からんとす本日も幸ひ天氣清朗一點の
雲なく風穩に船客せんかく悉く甲板に逍遙せうようし目前に見ゆるは紀州
熊野浦くまのうらにして彼の邊にハ蜜柑を多く産するなり等語り時
を移すこと三時にして下れば午後一時なり此れより各携
ふる處の書籍を繙き例の蠶業書と閱讀くわんげんするに此書は平易
にして如何にも題意たいいの如く實地を記せしものなれハ實業
に大益あるや知るべきなり元來此書物を編述せし木村氏
ハ何處の人間なるや摘桑曰く此人は兎もあれ菅野渡邊兩

人は福島縣第一等の養蠶家なれば日本屈指の人なり此等の人が検閲し且つ折田知事の大字もあれり如何にも有益にして世上の爲めになるもれにあるは基より木村氏も隨分有爲の人物なるへし苅桑曰く君等は此有名の木村氏を知らぬか元來此人の播磨國飾西郡苦編村に生れ先祖代々より農業に熱心にして吉田家につかへたるものにて殊に知治氏に實業教育家おれは教育新聞あり雜誌なり蠶業雜誌なり農業雜誌には隨分投書もありて實地と筆と相應したる人物なり而して此頃は福島縣に居れる由につき漫遊の途次必ず一面會するか宜しかる可しと兎や角語て居

る間に神戸港に船は着したりと瀛館數聲運船來り蓬萊舎安藤と呼ぶ而して此に案内をかさしめ同宿に至れば午後六時ありき其夜入浴し晚餐を吃し翌日に至り山城九午後三時に出帆せんとするを聞くも雖ども最早已に船にも隨分飽きたるに幸ひ兵庫縣有志者より頻りに足を止めよと述ふれば寧ろ兵庫縣より山陰山陽を先に巡回して後に九州に渡り九州より四國に渡りて再び神戸に着し東海道を巡回することに決したり

兵庫縣巡回の段

翌二十日腕車を命じ蓬萊舎を辭し諏訪山より布引の灘に

實業教育教育會

至り直に折返し多門通楠社に拜禮をなし嗚呼忠臣楠子之墓と題したる墓前に足を止め世には忠臣もあるもの哉此れ無究の鑑ありと袂に涙を覆はんとすれども洋服あれば如何せん東門と通し吟松亭に至り晝飯を催せんとすれば農商科の蠶業熱心の某氏來訪せられ遂に蠶業の談に時を移し結局今夜照會議事堂を拜借して實業教育會と名つけ演説を催するに決したれば再び諏訪山に向て入浴し晚餐を食すれば車に向ひと呼ぶ故に如何と尋ねれば随分多く人も集りたれば御苦勞なから早速御出下されと依て三人共直に車に塔し至れば聴衆無量殆んど千人熱らく伺へ

教育ノ意義

は商人多くして書生もあり官員然としたるものもあり又支那人獨逸人等外國人もあり先づ摘桑には壇に登り開會の趣旨を述べて次に實業教育會とは何ぞやの題に對して演す其論旨と摘要すれば教育といふとは俗に仕付といふことにて何ても較ても此世に生れたるものは此の御蔭を蒙て居らぬものはあらず此を細かく分けて言へば六才より十四才迄の學齡生を育てると小學教育とて普通科を教へ其内にも高等科とか尋常とかいふかあり尋常科とは此科を修めぬ者は殆んど日本人の資格を有せぬといふも可なり故に今に尋常科以上を卒へさるものハ議員となると

家庭教育

教育範圍無量大ナリ

の出來させん次に中學大學とあり又家にて嬰兒を父兄か
 仕付するこれを家庭教育といふ農なり工なり商なりこと
 を實地に教ゆると實業教育といひ升此れは一人一己の人
 々に取ての教育なれども政府には國家教育を施し警察官
 吏の治安教育と致すか如く社會の爲め人の爲にあること
 を致すの即ち皆教育とさります然らば人は躋の下ある
 穴より飛び出て棺桶に足を容るゝ迄の間は教育の御蔭を
 受けぬものはありません故に教育の尊きこと斯の如く
 に致しまして私等も及ぶなから商なり工を勸め殊に農業
 の中にも養蠶と製絲の改良と桑園の仕立方を説て幾分か

養蠶説ニテ局ヲ結フ

桑ノ仕立方ヲ詳ニ論ス

社會の實業教育を致す積りですと此間ヒヤクの聲滿場に
 溢れたり次に高木壇上に登り拙者は訥辨ながら桑の仕立
 方と説きます爰に御出の方に、桑仕立方等などの無用の
 御方もあるなれども漸時御聞取りありて實業者に傳へら
 れんとを此時「フ」の一聲あり偕て桑の仕立方には種々あり
 まして殊に山形以北の如き雪の深き國や山陽四國九州の
 如き雪のなき國やありますれば其土地の寒い暑い地質の
 有様等に由りまして各々異なる點もありて岩代の國邊に
 は市兵衛桑の早芽なれば五月廿日頃に採木を致しやす其
 採木も餘り早いも又晚いも能くありません其採木のと

の又別段に御談の申しますれども芽の四五寸位も生長し
 たるとき親木の株を深さ五寸位地と搔き除き大株なれば
 一株より七八本の幹又植付けより僅か六七年目位の中株
 なれば四本位曲けまして採木を致します其採木して翌年
 掘り起し撞木の如く切り再び植えて其翌年即ち二年目に
 なりたるものを通常の桑苗と申します而して桑園仕立方
 は従来麥大豆等を植ゑ付けたる畑を桑畑に仕立んとする
 には秋の末に當り農業も餘程暇になりましてたとき即ち一
 月下旬位に濕地あれば底堀と申し深さ壹尺五寸乃至貳尺
 位に掘り上げ其下には落葉塵芥の類を敷き込み置き翌春

桑園ノ耕方

に至り前に述べました桑苗を植ゑ付けます其春土地を畦
 作り致しますには早桑なれば南下りに中桑晚桑なれば北
 下りに地を搔き均らして植ゆるの私共の秘訣ども申しま
 す其理りの中晚桑の物質の如何により光線を餘り好みま
 せん故てあります加之からず晚桑の目的の晚桑に與ふる
 目的なれば葉の剛きは能くありません其植ゑます期限は
 早桑は四月上旬晚桑の四月の下旬位にして其植付方は並
 伍の目とて菱形なりに植ゆるが宜しくあります其分けは
 耕芸なり桑量を立樹のまゝ量ると肥料の施方に宜しきと
 てあります肥料は畑壹反歩に大豆五斗位養たるものへ備

桑ノ植エ方

肥料ノ施方

粕三斗程を搦かき交せ五六寸堀りて施すを長しとす又藁芥わらか山草さんそう麻糞まふん人糞じんふん焼酎しょうちゆう粕大豆あま豆鱒粕ますぼ其他水肥いそけいとて人尿しんねん濁水にごりみづ泥等どろらも宜しくあります尙々詳かに申たくありますなれども時刻も迫りました故に後なる辨士に譲りますと壇を下れば苧桑には直に壇に登り水を呑で口を拭ひ後と見て演題と指し又手私の題は相も變らぬ桑の事に付て一言申しまする處であります桑の談とても迎も一日や二日での終り兼ねます故に桑の種類と其性質を語りましよう市兵衛といふ早桑かあります此桑の芽の萌立極く早くありまして葉は大けく其形ち瓶びんに肖ております故に又一瓶といふ人も

市兵衛桑

柳田桑

ありますそう致しまして初眠しよめん蠶さくに必用なれば何れにも培養致しますなれども二眠以上の蠶には適てきしません故に餘り多く植ゑてはなりません次に柳田此桑の八九年も致しますと芽の萌立つ前に花を生じます尤も早桑なれども葉が小さき故に市兵衛より劣ります然れども其桑は長らく柔なる故に三眠位迄の蠶にも適します此は基と岩代の國丈でありましたか今の何れの國にもあります次の早桑しよばさの白早桑しろばさとて甲斐の國に多くあります其芽の出る期節は市兵衛柳田より少しく晩くあります次には蓮花桑れんげ此桑の葉形蓮花の瓣べんに似にたるを以つて此亦随分萌芽早く稚蠶を養

白早桑

蓮花桑

青木コボシ桑

大和桑

中澤桑

ひ得て上州の山間に多く見受けました節曲此桑の枝か出る毎に其節の處にて曲ります故に名を負いしました此も上州山間にありまして前々述べましたより一層早くあります故に必用てはありますなれども初眠の間丈であります大和は葉大にして摘桑に便宜であります而して此亦随分早桑であります中澤は亦早桑にして三眠迄も蠶を養はれます此も上野の山間にありて随分上等の桑であります先づ早桑の部は斯の如くに致しまして此より述べますは中桑であります此間ヒヤどもノウエども云はず唯手帳に筆記するもの多し中桑にも随分種類ありまして青木コボシ

菊葉桑

小牧桑

赤木桑

といふは四眠迄も飼育し得らるゝと雖も仕立方随分六ヶ敷き桑であります此亦上野の國に多くあります次に菊葉といふの葉状菊の葉に類似し三四眠の蠶に適しますろう致しまして長野縣下に多くあります又小牧といふは葉充分大けくして新條極めて伸ひ二眠より三眠中ば位迄は適すれども四眠後は適しません赤木といふは幹と枝か赤く葉大けく摘むに便であります故に摘桑するも可なれども岩代國には此赤木とも以上皆菊桑であります即ち拙者の一家でござります四眠後の蠶には用ゐられませぬ併しなから如何なる瘠土にも生長致します次に近江越前

本大和桑

の兩國に多くあります九紋龍くもんりゆうですか此は斷へず葉和なれ
 の蛇蠶みかり迄飼育い致します然れども土地と肥料を多ほく好み
 ます本大和は如何なる輕土けいども粘土いども厭いとはす生長致します
 るなれども随分助兵衛か色好きか知れませんか實を早く
 結びます故に上等とは参りません乍あからしかうさき併接木へんせつぎをする爲め苗
 を取るに至極能くありませう先づ中桑も此位で仕舞しま
 まして晚桑のこを少々演べます武藏上野の兩國に元と
 は多くありまして唯今の諸國に移しました十文字桑とい
 ふ桑の一名霜くわりと申し升す此れ霜にかゝりましても
 損害はなく葉は少さくして收量多く光澤を帯おびひて柔みわかか

十文字桑

霜くわり桑

高助桑

ると以て老蠶迄に適し晚桑中第一であります高助といふ
 人が發明して別よ一種の變化桑へんくわを培養はいようして其の名を命し
 て高助といふ桑あり此は十文字葉より少し早く芽出て葉
 大に厚く然るに又桑であります此の從來磐城の三春邊に
 多くありましたか此頃は諸國しよこくに分株ぶんしゆしました亦此頃に此
 種より能く山畑に育つものを名つけて山中高助と申しま
 す其他高助にも二種もありて岩代國信夫郡に多くありま
 す小幡こはたは岩代國小幡村に出るものなりと又一説に尾畑村
 に出でしと其葉形高助より小にして三眠後の蠶ねづみに適あす鼠
 返かしは葉極めて少にして薄し然れども枝葉多く且の柔な

山中高助桑

小幡桑

鼠返桑

細江桑

丹波木桑

青庄堂桑

赤梢桑

魯桑

れは近來新潟縣下に移植し又岩代會津地方にも多く見るなり細江は芽晚く葉柔なる故五齡の蠶に大に適す然れども耕芸培養宜しからざれば繁茂し難し且つ年を経れば樵を生ずるなり江州琵琶湖の東岸に多く見ました丹波木の葉大にし柔なり此元と丹波の國より但馬の氷上に移して此名を命じたりと筋柔此は上州の山間にあり喬木仕立即ち摘桑にするに適す庄堂葉極めて大に且つ柔かに東京近在に多くあります赤梢の赤木より出てしものにて上野山間にあり摘桑仕立にすべし魯桑は明治七年清國より輸入せしものにて始て東京試験場に培養せしか此頃諸方に渡

りました葉伏極めて大に其表面光澤を帯び甚だ美なり三齡以後の蠶に適します此外種々あり又外に小生の知らざるものなり定めて多くありましよなれども先づ此丈でおき升何如となれば拙な長談とチンの顔の長さの好きものではありませんと笑と含み叩頭壇と下れば神戸の蠶業熱心太郎には壇上に登り拙者も未熟かから何か演べる積りてござりましたか餘り時刻か晚れまいたし尙有益ある御談も澤山御聴取りになりたれば却て香席を漬してはなりません今晩の先づ此れで大に御足勞でありましたと報すれば將に時計十一時二十分ヒヤ〜下駄がら〜然た

舞子濱ヲ過ク

り而して三人は神戸有志者諸君と車を諏訪山に飛ばし一杯を傾け翌朝海上の絶景を嘆賞して車を雇ひ三里か濱舞子明石等の佳景を望みつゝ姫路を越へて神東郡淡賀に一泊す

播磨國神東郡宿泊の段

此夜適々來り訪ふ人あり此人甚と但馬地方より此地に來り住めるものと見え但馬語にして能く蠶業の模様と聞く年齢四六に近くして齒を涅め眼胖妍に體和かに舉動靜かに恰も情あるか如く名と問へい言はず唯旦那御談と承りに參りましたとのみ遂に年にも相應せず長袖を以て左顔を

覆ひ増々情あるか如くして言はず夜も靜かに三更を越ゆる尙退かず遂に摘桑高木の兩人酩酊に伏せし苜桑に向て旦那言ふも耻かしく語るも面目なき次第なれども御頼みかある御開遊さるやと甘言を以て瞳眼を轉する故に苜桑に何事かと考一考言はずして胸中或は樂み或は痛まんとするに女子曰ふ餘の義にいななくも嗚呼がましく申上ること何卒妾をして旦那の紹介を以て上州又は岩州にて實地に養蠶することを學はしめんことと苜桑曰く何より易きことなれども聞くところによれば本郡の郡長公なり某郡吏戸長其他諸君の熱心にて既に昨年來當地に於て福

人間交換法

島縣下伊達郡より教師を聘せられたこともありと此にて御學ひにては如何と尋ぬれり御尤の次第あれども實地に御願申度と尙妾の意見もあれり是非御願です其他望む處の交換の法であります譬へは兵庫縣の人間にして百姓奉公するものは福島縣の百姓に瓦職は瓦職に小學校の教員は教員にと各々改良をなさしむ爲め彼に未熟のものを此れより此に未熟のものを彼に交換する法にて福島の人に蠶業に長けたる人の兵庫縣へ蠶業と外に兼業に採用し雙方共益することを考へたくあります斯く申すと妾ども何ぞ優れて居るかといふにそうてありませす一唯機

機織ト言語改良ハ
福島縣ニ必用ナリ

採木ノ種類

織を致し及はすなから言語の改良も兼ねて福島縣に御世話願度ありますと彼此互に言ひ時計を伺へは最早午後一時なるを以て亦明日と約して別る其翌朝昇淡學校を假り受け教育及び農業演習會を開く聽衆八百七十名蒞桑壇上に昇り採木法を述べ採木よは簾子採傘取撞木取りの三種あれども岩城岩代に多くありしか僅か壹反歩につき七百七八十本位でありますれば撞木採りども壹反歩に一萬四千五六百本も採り得られます法か流行てす故に此頃は撞木採許りになりました依て撞木採法を論じます此撞木採をなすの法の壹反歩に親木三百二三十本位植ゑ土地の可

採木ノ期節

成的砂地を避け其土を撰あらみ能く培つちかひ養ひ春の八十八夜即
五月一日頃に至れり其採木をなさんとする桑園を耕芸し
五月十三四日に及び新しき芽か四五寸も伸長すれば親木
の根際ねぎわを掻かき碎くだき其根本ねもとの一寸五分位に少しく外圍に至
れば三四寸の深さに堀り鶏糞の類を施し採木になすべき
新抄しんせうの其親株中第一に勢の強きものを撰み尤も上等の二
三本許り幹の出でたる株きの八九本又七八年目位は株に十
三四本位なれり其内五六本を和かに曲け其芽を上方に下
になりたる芽は悉くかき取り土に伏せ上よりさらく〜と
一寸五六分土を堀り掛け足まで踏み付けて二十日程過ぎ

親木切斷ノ期

ますと芽か一尺も出ます其時又土を手にて掻き集め足に
て踏み肥料を施し七月五日即ち半夏はんげの候位より土用迄の
間に親木と採木の間一寸許り皮を皮下層ひかそうとて其皮迄傷け
置くときは自然親木より水脈すいみやくと通すること少なき故に一
度は少しく衰へますなれども仕舞まひには能々太どり根の出
し方が宜しくあります之を根本より順次に撞木の如く二
寸五六分位に切り離し系根とて小根も四五寸位に切り之
を細かに碎くだきたる土地に地休つちやすめと申して假植致します其
假植の手續てうきは乾肥を施し土を細かに鋤すき返へし畦みぎを二尺
位に六寸隔てに間を離し東西に向け苗を一本宛備へおき

地休メ

畦ノ作方

一年苗

柔なる土を寄せ悉く足にて踏み附け二旬も経れり水肥を施し秋の彼岸ひかん即ち九月十九日に至れば幹も充分成長して將に落葉せんとする前に高さ壹尺五寸位に梢頭を切り置きます此を一年生と申しまして極く能く根の出たるものなれり可なり成る丈殊に遠方に送るものは二年苗とて又此れを前手續の如く植ゑ翌年に至りて植ゑ付けるものと致します爰に面白きお談かあります某の蠶業に熱心らく言て我れか桑苗を世話してやる等申し一年生にても宜しく故又安く送り呉れ云々申込ました所るか福島の人にハ社會の爲めにあらうといふ人さへも斯くの如くと歎息

苗買入ノ注意

傘採ノ場所

して斷りましたり昨明治二十年のこととてあります此等の事なり桑一切のことは木村知治氏か著す處の蠶絲業大全なり桑樹全書なり蠶業書なりに詳なる故に御覽おられませ一寸一口附て申上おき升傘採りになすに及びませんと雖も稽古けいこの爲めになさるゝ御方の土地西よ山を負ひ東方開けて土砂どしゃ交りの河邊等を宜しくあります其外ハ殆んど撞木採りと同じこと唯傘採りは幹を曲けず其立樹のまゝ株に土と蓋おほふて採る法なれり幹一本にて一本の苗より取りません先つ此にては壇と下るに餘りハヤハの聲なくして唯壇を下るの際聴衆頭を下るの人多かりしのみ然れ

とも有志者の悉く筆記をなしたり次に更るゝ演ずるの
 處何分連夜の勞かれにて此で閉場又次回に譲りませ云々
 聴衆遺憾の顔色のものもあり平氣のものもあり小僧連は
 鼻を垂れて何氣なくすんだゝと走り出すやら老人杖を
 失ふて狼狽する等ありて随分混雜せり時に十二時ならん
 とす依て旅店に歸り晝飯し車を飛ばし但馬の城の崎に至
 り一夜演説且つ幻燈會をなすと雖も唯博物天文等の書を
 寫せしなれば此書に載せず二泊入浴して養父郡に至り又
 播磨の宍粟を隔へて姫路に歸り坂本町常小屋にて其夜幻
 燈器を以て教育上なり蠶業の演舌をなす聴衆千二三百人

教育ノ種類

國風教育

實業教育

先づ開會の主意を摘桑か演し當地の織物場と桑の植付を
 悦よろこひ其植付けの悪しきを語り本題即ち姫路人民に望むの
 題此時ヒヤゝの聲溢る又手望むこと多くありますな
 れども出來るとを望まかなりませぬ然らぬ私の望む何
 ぞと云ふに此邊に餘り振はざる教育と實業の御談であり
 ます先づ教育と申しますと色々のものを作り出すといふ
 こととす譬へば人を作り拵へるを人の教育といひ國の風
 と直しくするを國風教育といひ農業なり工商業なり蠶業
 の如きものを改良して益を増々考へる法を實業教育とい
 ふ然れどもつまり人を作らざれば物を改良することか出

小學生徒、國家ノ
元素

來ませぬ其内にも小學校は普通教育も教ゆる處なれば此より尊き處ありません小學生徒は國家の元素にして小學教育は此元素を造り出すものなりそこで私の諸君に願ます處此土地に適する實業教育であります此近在は桑の土質に適ひ此市中の製絲場に適ひます其水といひ風習といひ物價といひ實に適當の處です故に此市中に一の養蠶學校を起し此よりして近傍に養蠶を數へ其繭なり三丹州の繭と悉く集め姫路にて製糸し此を直に外國に輸送するか又直ちに織物にするかすれば宜しくと存します此等の所以と縷々説きたくありますれども少々口頭を痛めまし

養蠶學校ヲ勸ム

土地ニ應ジテ肥料
ヲ施ス

た故に半途にて失敬いたしました聴衆ノフゝ次に高木壇上に上り演説次回に譲りまして質問會を起します桑の一條に付ては何なりとも御質問ありたし肥太郎問ふ桑には如何ある肥と施して可なりや此は一口に言ふと何てもありませんか随分六ヶ敷くあります如何にとなれば土地の寒暖地質の輕粘等により異なればなり譬へは暖なる處には同じ肥料にても醱酵せざるもの寒き土地には醱酵したるもの早燥の地には水醱濕地には塵芥の類輕土に動物性のもの粘土に植物性のものを宜しとす然るに此迄の人は何も角もなく腐水たる肥料や醱酵したるものが上等

人造肥料

疫病

桑病ノ種類

と心得て居りましたなんど大なる誤りでありませす而して植物にも依り肥料の種類異なるにもありませすれど米糠を除くの外何にても可なり米糠は虫害を來すことわれは用ゆ可らず拙者の友人は桑に第一適するものは山草なりと之を施すの期節は半夏土用の候にすべし第二の泥なりと申しました又此頃の人造肥料とて東京本所區松原製造所にて過燐酸加里窒素含有物等を人工に製せしなり此は桑に至極上等でありませす其外岩代には大豆を多く用ゐます病吉問ふ桑の病と除くの法如何桑の病には色々ありまして桑の疫病といふのの黄色になりて枯れます又縮病と

縮病

豫防法

て葉か縮み幹に錆を生して枯れます此は多く地中の根より來りませす其他黴菌の爲めに枯死するもありませす此等は其發病の樹を直ちに掘り起し土を取り除くか火にて焼くより良法はありませせん又藥を用ゐる法もあれとも餘り感心致しません故に癒す手段より寧ろ未だ發せざる前より豫防するを第一とす譬へは桑園仕立のとき土地の掘り方淺く或は濕氣除をせず或は岩石ありて根を充分に出す能はざるものなれり此らに能く注意し且つ又少しく發しかゝりたるときに其患部と除去するを宜しとす買次郎問ふ桑苗を買入る手續如何此は能く注意せねはなりませせん故に

桑苗買入法

其筋は依頼して農商科の紹介を待つか又能々知た人より以て其土地の明ある人に照會を致すべし即ち此書を著したる木村知治氏にハ能く各縣の事情に通したり故に桑苗のみならず種紙等も願ふべしと時に時刻最早十二時なれば閉會とす併して其日より一二日滞在して岡山縣に向て出發す

岡山縣巡回の段

其途次和氣郡三ツ石に一泊して臘石山の景況を筆記し其翌日岡山に達す其近在を巡回して其翌々夜農談會に望めば會主より一條の演説と促す故に早速諾して演説をなす

桑苗ヲ植エ

桑田ヲ開クニ目的ヲ立ツヘシ

其大意は桑を植ゑることが此頃大に流行致しましたか餘り好しといふ譯てもありません直に其目的を考へずして猥に一時の考と起して植ゑることか多くあります此れ我共の流行と名つくる所以であります今下手に氷呑百姓等て僅か一反や二反の田地を持たとて此に桑と植ゑてさらん三年間は無作米も麥も取ることは出来ませぬ其間何と致して暮します僅か一年間不作でさへ困るに此に代つて澤山に田地を持て居る人は桑と植ゑますと三年間は皆無くなれども四年目には少くも繭三斗五年六年には六七斗十年も致しますと一石位飼育することか出来ませぬ此を

大農ニ桑園ヲ勤メ小農ニハ勤メス

極安値に積りまして四年目には八圓十年目には二十七圓の益を得るでありましてよか然らば其益のあること米麥より一層過ぎてあります此れ大農連に桑を勸める譯てあります斯く申しますと大農も後日の益を圖れば小農も亦斯の如しと基より小農にも桑を植ゆる者不賛成にありませんなれども一時困ると又大農に桑を植ゆれば小農の此桑を買入れ養蠶をするか又養蠶はせずとも其幾分の益を間接に得られるでありましてよか愈々植るに致しまして桑苗を此地に取寄せます何處からと申しますと先づ長野縣よりの上野岩代等を便利を致します上野岩代

の漁車にて横濱にまいります此横濱より海上を取りよせますと何てもありません併運賃か入ると思われる御方は實を蒔き接木をするかよくあります其接木をする前に實と蒔く法を演べます桑榧を能く熟しませれば採集め致しまして目の細なる針金製のふるゐにて水中に浸し洗ひ髓質を少しも残らず洗ひ得れば陰乾して翌年春の彼岸に蒔く其手順の相應の畝を作り肥料を施し其上に蒔き散らし細なる土を蓋ひ藁と其上に敷き餘り乾かざるやうすれば芽を出すべし五月頃二三寸芽を出せば其極く悪くさものの即ち縮葉を間引き能く肥料を施し麥畑同様に耕芸すれ

ば其年十月頃に至りて二三尺にも至るべし然らば此を直
 る其翌年接木するか又一年假植して接木致します接木の
 法は次回に次の辨士か述べますなれども此頃の如く便利
 の世になれば別に御邪魔なれば接木も及ひません直に
 苗を御取寄せられて宜しか併し請求者か多くあります故
 ら引足りませんと頓首壇上を下れば次の辨士壇に登り私
 今般始めて當地へ参りました故に始めて御目にかゝりま
 す訥辨なから一條の演舌を致しまして御耳を瀆します又
 手私の問題は相も變らず桑の談てす即ち先の辨士の言ひ殘
 されたる接木法てござります接木法は東洋ては漢土に早

く行ひましたか西洋ては意大利國に随分早くありまして
 藥品を以て多く接しますなれども日本ては藥品は用ゐま
 せん併し此頃漸く用ゐることも致します接木とは不良木
 を良木に改作するの手段にして春彼岸前に臺木を土際の
 上五六寸位の處より鋸にて丁寧に切り其切りたるものを
 直に木材質と眞皮との間を剥き割り其間に良木の梢も二
 三寸位になして七形状に削き割りたる間に挿み繩にて堅
 く纏ひ泥を塗り付て光線雨露の當らざるやう笈の類にて
 包みつくものです桑は殊に接木に於し易く又臺木に芽の
 出つることも少けれども柿梅桃等は臺木に芽を多く出す

接木ノ種類

故に其芽の出つるや否や剣き取る所てす然らされば勢力接木に至らす枯るゝことあります又松の類とても接木になし得べしと雖も手際も早くなして樹液の出てさる間に接りされば枯れます又蜜柑の類の其臺木を掘り起し宅にて接き植ゑ付くることもあります又桑とても左様にでけるものてすか餘程上手の職人にあらされば出来ません其接方には割接舌接鞍接等十一二法もあります扱て拙子は先づ此迄にて壇を下り次に某辨士は壇に登り日本の婦人論と題を掛けて女子の教育の必要なることを説きたれども此の略す而して旅宿に歸り圍棋と立花を樂み半日を

消す其間老人來りて煎茶なり濃茶をなす饗應鄭重なりき

廣島縣巡回中妹に邂逅する段

岡山より歩を進め漸く安藝の國に至り賀茂沼田の兩郡を巡回して遂に石見の國境に近き野呂山脈に沿ひ山林を跋渉し地形を探くるに地皆礫礫にして田野開けず郡村往々荒蕪せり余思ふに此地を開穿し礫礫を去て二三年間生草を鋤き返し地漸く改まれり山中高助の如き桑を植ゆるを一大に益あらんと物語り或寒村に至り農業の大切なる桑園開墾の急務なる且つ小學教育の必要なるを説て彼此二三日經過し可部川流に沿ひ遂に廣島に達し其翌々日海上

山中高助ヲ植ユヘ

女子ノ蠶業ニ熱心ナル事ヲ知ルヘシ

に舟遊し能美島瀬戸島似島巖島等を巡り絶景を愛し後再び廣島に歸り養蠶飼育法を演説せんと郡吏某に照會文と認め中障子の外より然かも二十年前後の美人の聲にて御免被下度と障子を開き直に席に居直り頓首々々私は丹波産の者てござりまして二歳の年父母より離れ兄に近江路へ出向き私は叔母の内にて養育せられ昨年當地に参り奉公致して居り升す此頃蠶を飼ふ業が盛になりました故に貴君方に依頼して其道を學べと主人の仰せてござり升何卒御願が致したくと頭を揚くれは血が知らず摘桑に自分か十四歳の年妹に別れしなれば能く其顔に似ひ言葉

口妹ノ情察ス可シ

船中ニ物語リシテ妹タルヲ知ラス

と云ひ笑顔と云ひ餘り能く似て居る故に父の名なり母の名あり親族なり種々尋ぬれ如何にも我妹には相違なく互に悦び互に泣き涙に袖を拭引言はんと欲すれども語る能はず兎や角する間に高木曰く何んど兄妹の行末分り此上もなく結構な事てすかあなたはオテフさんではありませんかハイ私のオテフです何故御存じかへ山城丸に乗込みの際船中に御出でになりましたがと云ふと何れも驚き手を打ち互に顔を見合せ摘桑に何故に山城丸に乗られたぞと尋ぬれば主人に連れられ乗りました夫れては我輩に福島縣に連れ呉れと云ひたは御前かと泣や互に涙の

袖を以て顔を覆ひ彼此する間に積る談は山々語る言葉は
 廣島先つ一杯も祝酒を酌て例の如く照會文を下女に托し
 互の志想を吐露し遂に摘桑には妹を連れ主人の内に御禮
 に參らんとするに旅宿の下女連の妹ども知らず旦那御樂
 みてす何處へ居れますかとイヤ二人で何處か料理屋へ出
 掛ける積りなりと二人は主人の宅に至り其譯柄を主人に
 談じ摘桑は大に妹の御世話と謝するに頭と叩けの涙數行
 男泣に頭と擡けず六々に談さへする能はず然れば主人な
 り主家の人等は皆打ち集りあなたのを夜も晝も申して
 居る故に我等も何と加して兄に逢せてやりたくど先月も

已ニ尋メル時ニ見
 當ラスシテ偶然ニ
 逢フノ情夢ノ如シ

態々連れ横濱へ參りました退手に神戸港に上陸し西京邊
 迄も少しの尋ねて見ましたか其儘歸りオテフは日夜琴平
 神社に參詣して祈りて居りましたと足曳の尾の山鳥の永
 くしき談に半日を消し夫て今三ヶ月程丈け御世話下
 さへませ其内巡回終りて歸りますと再び迎ひに參ります
 と別れたり宿に歸れば照會文の返辭に今晚七時より常古
 屋にて演説なし呉れ人民まで已に通知したり云々依て晩
 餐を吃し演説場に赴きし午後六時半あるに聴衆山をな
 し無慮八九百人其内官吏なり書生なり商人なり何れも隨
 充多かりけり

廣島にて演説の段

桑ヲ蠶ニ當ル法

高木演臺に上り私の飼育に先ち桑の御談と致しませう桑は摘取りて直くに蠶に掛けるよりは少し致して振るを宜ろしくありませう然れども積み置くときハ蒸せ易く此の蒸せたるものを蠶に與ふれハ大害かありませう又朝露も頁しからず殊に雨天の濕氣しつきは大に害ある故に二三日前雨天に先ち摘み處々に窓を穿ちたる藏くら様の内に柵かきを附け長方形の目籠に入れ置き濕氣を去る可し然れども乾き過ぎて枯木たるハ宜しくありませう又餘儀なく雨天中に桑を摘みたる時は荒庭に薄く並べて其上より又庭を蓋ひ一時間も置

濕氣ヲ乾ス法

桑ノ刻ミ方

止桑及ハ桑付ノ加減

けは乾くべし次にハ桑の切り方です桑の刻み方ハ掃立毛蠶の頃より平常は蠶の姿と同等の寸法に切り蠶將に眠らんとする際には少し細かに刻む譬へは蠶一寸なれば常ハ一寸許り眠蠶に附にかんとするときにハ七八分位而して刻み桑ハ四眠後三日迄とす其後は刻まず振るべし刻めは却て悪し、此れ蠶の運動となすに荒桑なれハ幾分か攀ぢ得易き故なり次にハ桑止め及び桑付の加減かへんです初眠桑止めの時節ハ蠶坐の内有ら増し眠り附て後一尺方寸の内起蠶立七疋見ゆれハ桑止です併し信州は長方形の籠かご甲州邊ハ丸籠まるかご其他處まろくハ蠶を飼育するものハ違ひませうけれども

蠶數ノ位置

尺寸の割を以て御談をすれり同じ事てありませう桑付けの
 眠蠶一尺方寸に三四疋残りたる時分に細かに刻みたる桑
 を七八匁サラ／＼と振り掛け又二眠に至りても大概一眠
 の如くし三眠に至りて自然暖氣も増し蠶坐も増殖するを
 以て徑二尺六寸の蠶坐むつざに起蠶二三十頭も出來た時に桑止
 めとす即ち一尺方寸に八九頭の割合であります尤も南風
 等水蒸氣を含める烈風れつふうか吹くときり起蠶一分通り乃至二
 分通出來た頃少々振り掛け置いて後直くに桑止めとしま
 す桑付けの好期に有増し起き揃ひ一尺方寸に八九頭残りあ
 る位に振るてあります又四眠起きり不揃ひなるも構いませ

桑ヲ眠ルノ時間及
ヒ度數

せん故に全坐中六七分も起きたる時は桑と振ります其間
 に振るにハ時間がありまして掃立はきだてより一眠迄は四時七時
 九時半十二時二時四時八時十二時三眠迄ハ四時八時十二
 時三時九時十一時四眠迄は四時九時一時五時十時上簇迄
 は四時十時四時十時とす即ち一眠中ハ一晝夜八回にて初
 眠迄の桑量は種紙一枚即ち毛蠶四匁の割にて二貫六百目
 二眠迄ハ六貫九百目三眠迄十五貫目四眠迄ハ三十四貫目
 姥熟迄は百七十五貫惣量二百三十貫餘てあります此迄私
 共述べましたるハ通常の時侯にて通常の飼育法てすか故
 に能く段々に何れかみな演じます通り時間や寒暖やを考へ

清冷温暖兩育ノ譯
柗

臨機應變りんぎおうへんになされん事を望みます又手餘り永たらしひ談
を致いたしますと皆様の欠おとてす故此れて口を閉ちますと頭と
低け満場を一眼見渡し壇を下りたり次に本日適々來たる
か如しと雖も矢張り温育とか清涼育せいりやういくとか云ふ事を申しま
して素人は別法のやう思ふて居りますすけれども決して分
ちかある事ではありませぬ假令は御存の通り山形縣なり
福島縣なり就中米澤會津白河三春邊はるの寒冷か強くありま
す故に火力を用ひました此の用ひ方も此頃は能く衛生と
か生理と申します學問か流行し且つ農商務省よりも一
入手てはを入れらるゝ故に温度には寒暖を計り空氣の腐敗せ

奥羽邊ノ談

東海中國ノ談

さるやう戸障子も時を以て開閉する事にちりました故に
腐敗はいは致しませんか無茶苦茶むちあつかに温暖を以て育てました時
に能く蠶いとり腐りまして大いに失を致しました此に打て代
て東海道邊なり丹波丹後邊の如何ある寒い年にもどのや
うな冷へる日にも火力を用ひず自然の氣候に任じました
故に永く日數を費しとふこう致して居ります内に入は飽
か來まして自ら手か行届きません故に又腐らしたり病蠶
を拵へました此等を兩方共能く考へて見ますと何れも愚
ろかな飼育ですそこで此頃は如何なる暖國ても天氣不順
なる時に火力を以て天然の寒威を補ひ蠶室と暖めます

兩育折衷スヘシ

炭酸瓦斯ヲ防ク法

又寒地と雖も暖かなる日に四方と開放して涼冷に致し
 ます而して其火力を用ゐる處に能く注意致しまして乾
 燥に過ぎぬやう蠶坐蠶業と檢し又炭酸と云ふ惡氣の蒙ら
 ざるやう時々障子を開かなければなりません然るに障子
 を開けば亦冷氣になりて困る事われに此時其炭を能く紅
 煽し灰に沈め其火鉢の傍に水を入れ半は蓋を開き置けり
 水蒸氣の爲めに炭酸を吸収するものであります故に此等
 の患を遁かるゝ爲め其飼育室にて直に火力と用ゐる隣室
 にて用ゐるか又其室にて極低温にして隣室にて補益す
 ると長しと致します此の事木村知治氏著す處の實地應

炭酸瓦斯ヲ避クル
良法

用蠶業書の委しくあります能く御覽あられたし先づ此デ
 ト壇を下ればヒヤ／＼ト拍子喝采閉場を告げ遂に飼育論
 を説かず當地を去るに斷定す其夜一泊其翌日より周防國
 山口を経て長門の國豊浦郡に至り平家にあらざるも檀の
 浦に陥り早鞆の瀬戸と亘り豊前の門司か關に上陸す此よ
 り企救郡を巡回し遂に宇佐八幡宮に詣し後豊後國大分に
 赴き農商科より大分郡役所にて掛りに面會し物産工業教
 育等の模様と探り某君の發起にて晝は演説夜の幻燈會を
 開くに決したり

大分にて幻燈會を催す

此日實業教育演説をなすに約せしか他に政談演説あるを以て延會となすに政談演説會幹事より出席を命せらるゝと雖も拙者等は唯實利主義の男子なれり別に政治上の事の無調法なりとて斷然斷り某貴顯きけんの元に遊びたり然るに種々政治上の事を質問せられたるにつき左の如く答へたり先づ結婚條例改正けつこんじようれいより學校にて唱歌しやうかを教へ猥褻わいせつの俚諺りげんと止め風儀と正し春氣の發動を晚くせしめ且つ品行を直して後にあらされは唯戸籍上の結婚か更まるのみ内情決して改りませぬ又我國民法商法憲法等を拵へるには人の等位を定めざる可らず此れは智識百千學校卒業證を證據

皮相論ヨリ入實際
論ニ注目スヘシ

卒業生ノ貴キ事ヲ
顯ハス

とするより外なかるべきなり又萬國交際上に取りてい言ふ可らざる第一の要件あり此れ智識にわらずや等答辨しつゝわれは麥酒の饅ひんを口拔ぬき我等に給たまへり後來否已に晚れたるか我國尤も急事業を開て國を富ますと教育を盛にして人智を高むるより外なし實に子等こらの樂しきものなり先一杯と盃を拜し又答へて云ふ尙兵力も強くせあゝりませんか此等も金と體育即ち學校體育か必用てす其他何をなすにも小學か元ですから此の方針が第一等てす御縣の教育の餘り盛なりとも申されませぬかと言へり貴顯には實に恥入りたり尙一層注意すべし云々遂に坐を辭し歸り幻

奥羽ノ蠶具圖坐ノ
寸尺

燈會に赴き蠶具第一着に照したり其順序を記すれり第一
 國は奥羽に用ゐる蠶坐わらざてありませす少々大小ありませすれど
 も大略内徑二尺六寸五分と致しませす此時見物人互に立ん
 どするを某制止す第二ハ甲斐の國で用ゐませす丸籠てす第
 三番は何れにもありませす針金製の篩ふるいにて桑を蠶に與ふる
 時に振ります其振ります所以は桑か能くさばけぬと細大
 一揃になりませす故てありませす第四番ハ何處も用ゐませす桑
 摘籠てよさりますす五番ハ籐わらとて何れの處ても用ゐる蠶の
 巢蒙りするるとき此内に入れますすと繭を致しませす其大さは
 一間の荒薦あらこもにて製する故に大略長さ五尺三寸位幅貳尺三

籐ノ寸尺

以下寫スハ各國ノ
蠶具ナリ

寸深さ四五寸てござりますす六番は箕てありませして桑の蒸
 熱等をさましたり其他色々に使へませす七番は矢張り草蒙
 する籐わらてありませして此の薪にて拵へたる間に繭と作りま
 す其他但馬邊は唯薪を少々宛束ねて此と用ゐる處もあり
 ませす八番は竹の籠てありませして桑を包みたり蠶棚に敷き
 たりしませす九番燭臺夜る蠶室に光を點ともしませす決て石炭
 や油を燒もやしてなりませせん蠟燭に極りませす十番は蠶棚の
 上の方に桑を振るとき踏階十一番は手燭十二番は桑刻
 み組板庖丁及び鹽しほひてす十三番は時計十四番ハ寒暖計て
 ありませして尤も必要てござります併し寒暖計に三通りあ

りますか養蠶家は華氏を用ゐます十五番の蠶棚てありま
 して人か桑を振てをります處です此で漸次休みまして演
 説を致しますと燈火を明らうにして蠶卵孵化法を述べ皆
 今晚之能こそ御出になりました大けに御足勞てござりま
 したと聽衆を見渡せば一隅に三四名の美女あり笑と含み
 一隅に鬚を捻りて眼を光す人あり此を尻目で伺ひつゝ辨
 を振ふて演へる四月の七八日頃に至れば煤掃をちして蠶
 室内を清潔に蠶具と一切室に入れ薰蒸法とて硫黄と薰し
 或は二酸化滿俺五ポンドト鹽酸二ポンドトチ以て爾格兒
 燈にて室内を暖め尤も此の藥の割合にて十二疊の間暖め

蠶室掃除法

蠶卵孵化ノ順序

られます其時間は二十四時も四方を密閉しまして置け
 漸く其毒惡なる氣を掃へ昨年より傳はりたる小微蟲を殺
 してしまへます併し人も毒てあります故に此氣を嗅ては
 なりません而して二十四時間立ての悉く開いて新しき空
 氣を通いします斯く能く掃除ともした後は孵化の三週間
 前に此室に種紙と携へ來ります其孵化期の大略は五月一
 日即ち八十八夜てありますれども其土地の寒暖に因て大
 に違ひます其種紙と始めて室内に持ち來る時の大抵華氏
 寒暖計六十三四度とし次の三日は六十七八度次の三日は
 七十一二度と漸次其温度を進め發生の頃に至り始めて七

十五度と致します尤も種紙を天井裏てしよらうに釣りたるを以て二
 周間前は隔日と掛け代へます此と掛け代へませんも下に
 ありたる處の早く催青しますと演説を止め再び火を暗く
 して幻燈に取りりくるは今第十六番に寫りました畫の福
 島縣の渡邊養蠶家の蠶室でありまして第一は地形立坪第
 二は裡面第三は表面第四は東方第五は西方です梁間の四
 間一尺五寸桁行は撥間一尺柱の長一丈四尺五寸椽板の
 何れも松の六分にて細合せに下より風の透さるゝやう天
 井も同様に四尺四方の窓を開き開閉自由ならしむ此の拵
 へ方の漏斗状でありまして四方形です暖氣に過くるとき

蠶室

の戸障子窓を開き冷氣あるときは残らず閉つるやう致し
 てあります蠶室の鴨居下は襖板戸を用ゐる鴨居の上の残ら
 ず障子です方角の辰巳の方に向けるを最上と致します又
 南向も能くあります西南の方に五間位隔て樹木のあるの
 か宜しくあります而して燈火と明かに又閉會の旨衆人に
 告げ次に辨士壇を下れに聽衆開散其聲ザワ／＼ガラ／＼
 、又キユ／＼赤子のオガ／＼老人のヒヨコ／＼提灯の火
 螢の如く我等宿に歸れ午後一時にあらんとす

土佐及び伊豫巡回の段

其後肥後日向大隅九州悉く巡回して琉球島りゅうきゅうしまに航したるに

言葉適せず食料に乏しく困難の餘り首里に出て漸く命許り凌ぐか如し其後土佐の宿毛の濱に渡りたり此港の日向灘に臨み沖島姫路海上に撒布し實に絶景なり此より安藝郡香美郡等を巡回し高知に出てたり此縣は人民理論に走り世評に名高き程に實業と教育の大に衰頽せり依て大演說會を開き其趣旨の將來望むべきの何を云ても蚊を云ふても教育と實業程急務のなき故に政治上も必要なれども少し此實業と教育にも熱心しては如何と云ふ事と演じたりは或はヒヤ或はノウ此より股川の岸に沿ひ伊豫の國に出で諸方を巡回し宇和郡に至り宇和島にて婦人養蠶質問

會を開く先つ其模様を筆記すれば四十三人の婦女子彎曲に机に凭て各々番號を附し高木會長席に摘桑苧桑苧外に又蠶子育子の二女の筆記す其筆記の以下の如し八番問ふ掃立の手順は如何番外壹番答ふ其手續は土地の風により幾分か異なりますれども先つ奥州の藁坐を用ゐるを述べ藁坐の中に糊糠三四合を散し其上に美濃紙四枚と繼ぎたるものを敷き蠶種と其上に載せ置きます又非常の寒冷には小蒲團に包むもあります斯くして始め二三十頭の蠶蠶とて捨てますをして二朝位に孵化してまゝ種か上等にてす餘り永く四日も五日もに出づるは能くありませぬ

掃立毛蠶ノ量及散
布注

此時成る丈け二日も桑を給せぬか宜し一度給して後止め
る事ハ出来ませぬ又桑と早く付けるど不揃となります十
一番問ふ掃立の毛蠶の量及び散布法の如何番外二番答ふ
種紙に薄種と厚種と二通りありて薄種の二匁厚種の四匁
の毛蠶です其散布法は二匁を藁坐一枚致します尙附け
たり云ふ事かあります掃立より二十四時間は桑を食ふも
のてりありませぬ二十一番問ふ桑の振り方は如何會長曰
く此事ハ此度の巡回日誌に詳かてす先つ以て休憩を報す
れば下女を従せ一人の窈窕たる美女年頃の恰も三五の春
に三ツの秋と加へたりと思ふ者來り會長に名刺と出し何

桑ノ振り方

掃立ヨリ初眠迄取
扱方

卒傍聴を御願申しますと最も恥かしげに姿をして告くれ
と會長ハ得意然として夫れは御熱心に能く御出にありま
した先つ此れに椅子を命し談話數行較々ありて鑿柝か
ちく一同着席彼の女子と傍聴席と置くに番外一番の勸
めにより會員席と即かしめたり然るに此女ハ活潑にして
自ら二十八番と稱へ妾共は不肖ながら會員の席末を瀆し
ますと各員に向て述べ次に掃立より初眠迄の取扱順序を
拜聴致したしと會長誰か能く御存の御方は述べられたし
と筆記する處飼女立て曰く妾か不肖ながら岩代國伊達郡
保原村にて傳習せられたる説を述べましようとして掃立

の日は其儘二日目に至りまして午後五時八時十二時午前四時の四回に一回に付き蠶と同寸方の刻桑を毛蠶四匁分即ち蠶坐二枚へ六七匁宛與へ又午前七時十時十二時午後二時の四回に同く一回に八九匁宛の桑を振ります故に二日目には桑の量五十三匁三日目には蠶室の温度華氏七十八度蠶坐の全面に糊糠四合宛散らし蠶兒を其上に置き又前日の如く一晝夜に八回の給桑一回につき桑量凡そ拾匁位或は十二匁位と致します四日目には温度七十七八度として前目の通り一晝夜八回の桑と振り一回に拾二匁乃至十四匁宛と致します五日目には又華氏七十八度に致

蠶下ヲ除去スルノ
手續

しまして一回に十三四匁を午前三時より十二時迄に四回振り又午後二時より十一時迄に十五六匁宛を四回振桑致します此日は蠶坐二枚の處二枚半位の割に廣げます此分箔法は其土地の風により異なりすれども蠶の上に一面に糠ぬかを振り悉く糠上に登りたるるとき取替へます六日目には温度八十度にして給桑の一晝夜八回に一度毎に少しつゝ多く與ふ即ち拾五六匁乃至十七八匁迄とす本月初眠を催し致します故に午後一時頃に至り蠶下と去ります其手續は糠を蠶の上に掛け沈めて桑を其上に振り暫時致しますと皆其上に這ひ上ります其時分箔とす其割合は蠶坐

初眠振桑ノ度数

一尺四寸方に蠶千頭を目的とまます七日目に至り温度七十七八度にて午前三時頃に拾三四匁の桑を與へ全七時頃に又十三四匁を給し十二時頃に至れば満面眠蠶となる故に十六七匁桑を振りて止めます此の通常の方法ですが時候の變遷によりては又臨機應變りんぎおんぺんにせねばなりません又時に正午十二時なるを以て撃柝けきだく吃飯けふはんを報し各々食堂に移る已に午後一時を報すれの撃柝一同着席一番問ふ初眠中振桑の度数は如何八番答ふ私の學ひましたの通常七日間として四十二三度冷氣なれの三十七八度温暖なれの四十六七度位です六番問ふ蠶坐の置き方に別の方法あきや十一

蠶坐ノ置き方法

初眠迄ヨリ二眠迄ノ手順ヲ問フ

番答ふ毎日二度位宛上下又の前後と蠶棚に指し替ゆるか宜し尤も振桑の際しつかに取扱はねのありませぬ又二十三番問ふ初眠の略ば承知致しました二眠の事か質問いたしたくあります如何かと會長曰く初眠の事は略ば議か盡きたと見て二眠の事に就て討議あらん事と二十九番問ふ二眠迄の手續は如何誰れも答ふる人なきを以て會長自ら答ふ初眠の七日迄として八日目に至りての午前九時頃に大概起き揃ひたるを見て桑の葉を極く細かに刻み拾匁位薄く振り與ふべし午前十時頃に至り一頭も眠蠶なく悉く起き揃ひたるを見まして糶糠五六合を蠶坐全面に振り其

上に桑葉拾七八匁を刻みて振り與へます此れて初眠の桑付と申します此時羽箒にて掃き集め別葉坐へ糊糠四合程振り蠶下とて蠶の下にある糞なり桑の糞たまりくわなりを去ります此と岩代では起下おきした抜きと申します温度は七十七八度にして午後二時頃に至り十五六匁の桑を與へ午後五時と八時と十一時の三回に何れも拾五六匁と振ります九日目即ち二齡の二日目は華氏七十六七度の温度で一晝夜七回の給桑一回に十八匁乃至二十四匁の桑を與へます十日目には華氏七十七八度として又七回の給桑一回の量拾八九匁より二十四匁迄とす糞坐數四枚の處五枚に増し其の分け方

の初眠の時の如くて十一日目には七十七八度の温度にて桑量凡そ一回に二十匁を午前三時より午後十二時迄に四回午後三時より午後十一時迄に四回にて此時は一回に拾七八匁位に減ります而して午前十二時頃に至れば稍や二眠と催します故に蠶下を抜き去り糞坐數を八枚に増殖します此時蠶の割合は一尺四方に四百五六十頭位とします十二日目に至りては温度七十七度にして十二時頃起蠶十分の一も見ゆる頃桑止めとします尤も桑量の午前三時より全九時迄に拾五匁と振り與へます十一番立て問ふ振桑の度數の如何番外一番答ふ三十回を度を致します其他糞

三眠ヨリ三眠迄ノ
手續ハ如何

坐指替等は初眠と同事です會長三眠の事に取かゝります
三眠の手續を縷々説明ありたし七番曰く妾の一昨年關東
の御方より承りました事を述べて皆様の御訂正を願ひま
す三齡の第一日即ち十三日に至れば午後十一時頃に桑付
けどなります故に此日は温度七十六七度にして午前八時
頃振桑となすは拾七八匁位にままして午前十一時頃にな
りますと壹藁坐に糶糠五合位を散らし直ちに桑付けとし
ます其量は貳拾五匁です其後羽箒で掃き集め蠶下を去る
午後一時頃又桑を拾八九匁位與ふ此を方言に居直り
桑と云ふ而して午後六時九時十一時に何れも桑を貳拾五

匁宛振ります十四日目に至りては温度七十七八度に藁坐
數拾枚に増殖し桑量は午前三時より午後十二時迄に六七
回何れも三十匁宛與ふ十五日目には又温度七十七八度にて
午前三時より午後十一時迄の間七回の給桑一回につき三
十五六匁宛と致します十六日目に至りましては稍三眠を
催し午前三時より午前十二時迄に四回給桑し其量一回に
つき四十匁宛と致します午後三四時頃に至り三眠となる
此時蠶下を先づ去て藁坐數十八枚に増し其蠶兒配布の割
合は一尺四方に二百二十頭とす其取扱法の初眠なり二眠
なりに同し事です午後四時頃より午後十二時頃迄に桑量

三眠ノ注意

を少しく減し桑の刻み方も尙細かに三十四五匁宛を四回振る可し十七日目には温度七十六七度桑量は一回に三十匁宛に午前三時より午後二時迄五回與へて午後六時に至れば止桑となります其止桑の際には三十四五匁を與へるを宜しくあります十二番問ふ三眠の時には別に注意すべき事なきや否や二十三番答ふ三眠の桑止めは藁坐も俄かに増し氣候も較々暖かになりました故に蠶室の惡臭惡氣の蒙らざるやうするか第一の手です又桑止めは初眠も申した通り冷氣なれば減しまして暖なれば増します其加減は未だ眠らざる蠶十分の一位の時に致します桑付けは

三眠ヨリ四眠迄ノ
手順ハ如何

悉く起き揃へたるときにあらざるも一坐に一二頭位尙眠蠶ある時です此時會長休憩を命ずれば午後三時二分なり暫時休息して又午後三時四十分一同着席す四番問ふ四眠期の手順は如何番外二番答ふ十九日目に至りては七十七度の温度にて午前三時より午後十二時迄に七回の給桑一回につき四拾匁宛とす二十日目には七十六七度の温度にて午前四時より午後十二時迄七回の給桑四十五匁宛を一回毎に振り藁坐を二十枚に増す爲め蠶下を去ります二十一日目には七十六七度の温度にて午前四時より午後十一時迄に七回の振り桑にて一回に凡そ五十匁宛たる可し二

十二日目に七華氏七十六七度にて午前四時より午後十一時迄に又七回振桑をあゝ一回につき桑量五十匁たるへし本日は又午前十時に蠶下を去ります糞坐敷の二十七八枚位に四眼前なれば壹尺四方に百三十頭位の割に配布致します其配布致しますや否や直に少々の桑を與へます之を居直り桑と稱へます二十三日目に七十五六度の温度に致しますと全坐眠蠶となります然れども全く少しても眠らざるものありますれば振桑をさら〜と少し致します而して未だ眠らざるものに病蠶の顯はれます事あれば能く注意して直に取り捨てねはなりませぬ午後八時に止

病蠶ヲ見ル

桑です此止桑の量の五十五匁乾燥かんそうに過れの六七十度冷氣なれば五十匁以内で宜しくあります二十四日に至りては華氏七十五度の温度にて午前九時より午後二時迄に適宜桑量四十匁乃至五十匁と二回振りますさう致しますれば午後二時頃に至り桑付けなります此桑付の通常の氣候なれり悉く起き揃ひたる時て糞坐も多くなりましたし氣候も漸く暖かになりますれど蠶糞の臭氣等を恐れます故に七分通起きたれの振桑をして九分通りも起きますれば糞練を糞坐全面に五六合振り其上又桑を五六十匁與へます二十五日目に至れり華氏七十五度にして午前六時より午

後十二時迄に桑量七八十匁も振り午後四時より全十二時迄八十匁乃至百匁も與へ蠶下を去ります此時には稍々病蠶の見へます二十六日目には華氏七十五度として午前四時より午後十一時迄は六回桑葉七十匁或は八十匁位を與へます藁坐の三十枚として午前七時と午後七時の兩度に蠶下と去ります二十七日目には華氏七十四五度にて午前四時より午後十一時迄に桑量一回に九十匁乃至百匁と與へます已に午後十一時に成れば二百匁も與へ午前七時午後七時の兩度に蠶下を抜き去り二十八日目には七十四五度の温度にて桑葉の刻ます其儘一回二百目宛と午前五時よ

り午後十一時迄に四回午後十一時に二百二十匁位を振ります二十九日目には華氏七十四五度にして午前四時より午後六時迄に四回の給桑で一回に百二十匁位宛と致します午後十一時には二百匁位を與へます而して午前六時に午後九時の兩度に蠶下を去ります三十日目に華氏七十四五度で午前五時より午後六時迄に四回の給桑一回に百八十九匁午後十一時に八百三十三匁を與へ午前八時午後六時の兩度に蠶下を去ります本日の熟蠶じやくかんを少々見ます續て桑を與へ翌三十一日に至れば華氏七十四度にて午前六時より午後三時に蠶下を去り午後より熟蠶を簾に入れます

姥娘ノ時ノ手續ハ
如何

三十二日目には華氏七十六七度に進め人員を増して熟蠶の期を誤らざるやう速く簇に入れませす三十三日目には華氏七十五度にて同しく桑を與へ姥塵とて一坐に二十頭半熟のものあるも尙簇に揚ぐるものてす會長本日の時刻も移りました故に閉場致します明日は如何衆員今日だけ開會願たしと滿場の賛成故に明日開くに決して一同退場せし午後五時半ありき

女子養蠶質問會前の續き

前日の續き其期何れも三五或は二八又ハ四六の花女互に容貌を装ひ櫻の海棠が笑ふか如く情あるか如く何れも露

四眠ノ注意

を帶ふるか如く春霞の中に歩々足と曳き續て門に入る狀夢めか否本日は養蠶會に来るものなり偕て午前九時に至るを以て擊柝一音忽ち席に就くの聲さわく會長ハ整然得意顔して靜に頭を下くれは滿坐禮を述べたり然るに會長半氣痴にて鬚と拭ひ本日は昨日の續きを質問われよと報すれば二十五番立て四眠の注意ハ別になきや八番答ふ四眠ハ大低と稱へて此迄より必用ですか十分の二も眠れハ分前をなして直に桑を與へませす此不揃なるの患なければなり此分箔をするとき蠶ハ糸又ハ粘液にて桑を啄へおれば桑共に床替するか宜いです又四眠に充分桑を與へ

ねはなりませぬ二十四番問ふ熟蠶取扱法と番外二番答ふ
會長自ら答ふ蠶體十二節の内已に四節透明となれり消化
の徴しるしなれば揚くるも妨げなきものなれり已に六節迄透明
となりて尙蠶體は腹中に桑糞のある時に揚くるを良しと
す皆透明となる迄置けり蠶其巢成所そうせいじよを需もとむる爲め徘徊はいくわい
する故に疲勞ひろうして良繭と得る能よはざるものてすさう致しま
して紙製の平たき盆に大凡蟋蠶五六合位宛拾ひ集の此を
直に簇に移すものとす此時盆中に永く置き又り重て入る
可らず尤も此簇に蠶と移せば温度七十七八度にして風な
く靜に光線の透らざる處に置きます然れども空氣は清潔

になけれりなりませぬ故に能く注意して時々障子を開き
たり又温度に氣を付けなければなりません而して上簇よ
り四日目に繭を悉く結ふものなれり五日目又は六日目に
繭を採集致します七番問ふ種紙一枚即ち毛蠶四匁を飼す
るにハ簇なり人夫なり桑なり何程用てすか承りたし二十
一番答ふ蠶坐なれり圓徑二尺六寸のもの六十五度簇の縦
五尺横二尺一寸深さ四寸のもの八十枚荒糠四石五斗炭は
其年の寒暖により一定ならずと雖ども月を拾貫匁桑の量
は初眠迄三貫目初眠から二眠迄八貫目二眠から三眠迄ハ
五拾貫三眠より四眠迄ハ七十一貫目四眠より成繭迄ハ二

百貫給三百〇四貫五百目てす人夫は初眠迄四人初眠より
 二眠迄四人半二眠より三眠迄は九人三眠より四眠迄は十
 二人四眠より成繭迄は十二人てす總計四十二人位桑に従
 事する人は桑園の遠近により違ひます八番尙一言す温度
 の晝より夜に必ず二三度宛高くせなかりません時將に十
 一時半此れにて閉會となし午後開會一同此に望むに同處
 の郡長公其他戸長等も臨席飼女立て開會の趣旨を述べ續
 て郡長戸長等も演說何れも實業の必要を説く漸次すれば
 盃の交換各刺の取遣り頻りあるに例の紅袖白粉を装ひた
 る酌夫三絃を交へ一同華胥の遊をなし或は俚謠或は雅歌

或は流行謠或は雜曲何れも笑桃の蓄を含み騒吟の間自ら
 席整ひ大に快樂を極め各々宿に歸りしは午後五時半なり
 と共翌日宇和を辭し讚岐路に移り二日を経て讚州の諸郡
 を漫遊し又小豆島鹽飽等の島巡りをなし土質を檢査し續
 て丸龜多度津より象頭山琴平神社に參詣し數日を費し再
 ひ小笠原島に至り實地測量をなすに此島の周圍二十九里
 八町屬島二十有餘あり何れも篠笹等叢生して此島を開け
 は桑園に適する事を考へたるも蠶兒飼育には適せざるの
 地多しと見受けたり然して兵庫丸と云ふ小蒸氣に乗し淡
 路に着し三原郡を漫遊し遂に洲本に至るに洲本の此島第

一の都會にして人智漸く進むと雖も新聞上に評するか如く教育なり農業は開けず然れども將來目的のある處なれば此地人民の氣に應し幻燈會を開く其次第は次の段に面白かりけれ

淡路洲本にて幻燈會の段

此夜天色朦々晴るしか如く曇るか如く春風冷やゝかに月は梢に宿りて飛鳥は埒に迷ふと雖も幻燈會と開けり我先きと争ひ下駄の聲カラ〜履音キニー〜未だ此時に至らざるに立錐の餘地なく満堂聴衆山とせり因て燈火を暗くして寫出するものは伊藤茂右衛門氏か發明せし小燥殺器

小燥殺器

小燥殺器

械として某より送附せられたる圖てあります又手蒸殺の器械も種々ありまして一様ならず又其蘭の量に因て色々違ひかありますれば後に大なる摸擬を示すなれとも此は實に簡便の器械であります此器械の構造は松杉等の一寸貳分板にて拵へたる箱であります其内部に鐵葉又は銅の板と張り付け其金板と木の間に蒸氣を貯ふ爲め五分の空處を明け置きまして又箱の底には釜より蒸潑氣の騰る可き直徑六七分の圓孔と穿ち又上部の一方には蒸潑氣を外に洩します爲めに極く小なる孔をわけまして小なる管を指し込み置き強き蒸潑氣の爲め箱の破損を避け

ます此管に此れに寫りましたか如く蝶鉸てつがひを着けたる蓋に一方にの重りを垂れ置きますと強き蒸氣のときは此をのいて蓋か細く開きます又通常のときは密着する爲め護ゴ謨ハを付けておきます其箱の寸法は長さ三尺幅二尺五寸丈け三尺五寸であります蓋の此の通り山形成りてす此器械の寸法では華氏百八十度にして一時間に鹵壹石か蒸せますと私は今に使用した事はありません次に大なる圖を寫す都合の處此圖は破損致えておりました故に次回に譲ユツりますか此圖は高橋信貞君著す所の道中記に詳かてす一度御覽なさへど云て燈火を明かになし演説を始むイヤノ

殺蝻ノ種類

の聲滿堂に響く又手蝻を殺す法に種々ありまして蒸殺しやうつう燥殺そう蒸燥兼殺せんじやうけん蒸殺せん滾湯殺こんとう日晒殺にっさいてあります其内蒸殺は時間を費いやす事一時に多量の鹵を殺す事か出来ませれども黴かか生ずる事あります無論滾湯日晒等は能くありませぬ故に今は此を行ふ人なくなりました此頃の能く流リ行して實際に益のありますのは佛國伊國等に行ひました蒸燥兼殺であります我國でも随分はやります又澳國の「フリイドリヒハ」メルランド氏の發明せし蒸殺の硫化炭素にして蒸殺致します殺蝻加減は實に六ヶ敷八釜敷とございますが華氏寒暖計百四十度乃至百五六十度の熱度にて

殺蝻ノ溫度

蒸殺加減

四五十分外に蛹殺を得ます又百九十度に致しますと纔かに五分内外にても蛹殺か出来ます併し餘程完全の器械でなければ決して出来ませんそこで蛹の死生を檢する方に至つては種々おまして桑の葉や柿の葉などを繭と共に其室内に入れ置きその葉の萎みて枯れんとするを度と致します又冷水の温む度を以て試むものもあります一番體かなる法の試檢繭と稱す適宜に例の試験箱又は其内の繭の大小色々截り剖きて其切口滑かならず奇麗に帯紅白色に見ゆるの其度の色々に過ぎたりしかり此の加減て糸質を失ひます故に能く實地に熟練せねばなりませぬ餘り拙な

赤熟繭

鬼縮

小石丸

金黃

玉繭

演説にて御退屈と存します故に又幻燈を寫しますヒヤノ、唱采かつまひパツ／＼第二圖(1)此の赤熟繭あかぢくとて此中にも大巢中巢等あります而して此の随分何處にも此頃飼育します何故熟と申しますと蟋蠶せせりの時蠶の足か紅くなります次に青蟋せせりの青くなります此も随分飼育致します次に(2)の鬼縮と申しまして此の頃外國より渡り來りたるに上州の人某か鬼縮と名けました(4)の小石丸此も随分飼育しますけれども岩代に飼ひません(5)の金黃も上等です此の西洋より渡りました又玉繭とは數頭一繭の中に籠りたる惡繭です此の何れにも出来ませぬとも簇に揚げ方が多き

か又疲れたる蠶を揚げこすと出来ませ第三圖は第四眠起
 のものを自然飼になしたる圖です第四は蛾の卵をなす處
 ハハ蛹の出つる圖又蛹の出つる圖です第五圖は蛾の繭を
 結ひしものと將になさんとする處とてす尙今晚幻燈も澤
 山演説も二三題致す積りてしたが少一都合がありませ故
 此ておしまいと報ずれば聴衆ノウウ今少し云々言ひつ
 へ騒ぎ出つるの聲大水の瀬を穿つか如く大嵐の山を崩す
 か如し履聲小兒のあく聲に和するとき時計十一時を指し
 てブン／＼乎たり其翌日を辭し輕舸を明石の瀬戸に浮べ
 渡る事三里にして明石に達し籠屋に一泊入丸神社に詣り

須磨なり舞子か濱を経て兵庫に着し神戸三ノ宮ステーション
 にて午後四時發車遂に西ノ宮に着し酒造家を尋ぬ酒
 の事を談し此れに一泊其翌日有馬の温泉に入浴す恰もよ
 し土州の人富澤信州の人繭屋の二人入浴なれば能く言談
 一致す

攝津有馬遊の段

浴中一人の書生あり吟して曰く離名醫雖有馬温泉不癒戀
 慕と古詩體か今詩體否西洋體と見へ韻字平仄更に構はす
 唯句調能く聲高らかに吟せり然るに別室にはいとやさし
 けに美人然たる聲にてといしやさんても有馬の湯でも戀

の病はなをりやせぬと三絃に和し玄かも本調子ほんてうして實業家の魂を奪うばはれんとす而して土地凹字形くわうしけいにして飲氷に乏しく家皆岸に寄りて三階と思へは庭々と思へは二階にして實に奇々妙々ちきく然たり何れも一同に入浴すれば融くるか如く意緩漫くわんまんとして如何に放歌でもせんとすれどもいやくと暫時して浴衣を着けて一盃やらかしなから互に亦實業の談なり此頃糸の景況は如何何分宜く有馬泉いや能くしやれていやなるを繭の取扱法は色々有ますか何とか便利に良き法ありませんか別に存じませんか私共の扱方を一寸酒の肴に申し上まして悪い廉々を教へて願

ひます御承知の通り繭搔落は熟蠶を簾に揚げました日より五日目又冷氣勝なれば七日目に搔き落し繭の良否等悉く擇り分けまます此れと一尺四方に一升五合宛の割合に藁坐なり籠なりに入れて蠶棚に載せ置くに萬事靜かに取扱を致します此を蛹殺するものは搔落の翌日迄に種を製しますものは又別に良繭を撰みまます此談は後に致します此迄の繭の扱方を名つけて生繭取扱法と申します已に殺蛹終りますれば下等繭を第一の手に擇り別け次に通常の繭の大小厚薄又は玉繭豕繭潰繭敗繭も取り分け致しまして製糸にするものは其儘おれども此を貯へるに大氣の流

通良き場所に柵を架け繭を入れたる器を其上に擴け度々攪拌するものてす其度の殺蛹後二週間位は一日に三回其後四週間位の一日に二回其後は乾燥する迄一日一回つゝ攪拌致します通例は五十日も致しますと能く乾きます其乾きたるを檢するには其種類にもよりますなれども大略四分の一の量に減したる時を以て乾きたる證と致しますと云ひつゝ搔き飛ばし又蠶君に繭の擇方御談願たくありますと頼めは私の知て居る處丈け御談申します此擇ひ方には種々ありましたか此れは一州一國の繭を悉く集める位の大製絲場か又多くの學者的の理論てありまして到底

繭撰ミ方

色ヲ以テ分ツ法

我國目下の景況てす餘り細かに過ぎると存します故に私共の第四種に分けまして此内を少々區分致すてあります其法第一着に繭の色を以て區別致します譬へは黄金卵黄色緑黄色淡白色銀白色雪白色茶色薄華色等に分けます其理由の又々色を混して製絲致しますと生絲に彼是此斑點の如くむらか出来まして光澤ひかりかおません第二に形を以て別ちます形に大中小正圓楕圓片尖洞締等ありまして此れを分けませんと繭に人形より細大異なる纖維てすから自然生絲に細大不等か出来す爲めに練糸の際の解舒よかりして撚糸になすとき緩急不等と來し織物の地相大に悪

形ヲ以テ分ツ法

織維ヲ以テ分ツ法

緊緩撰ミ方

しくなります第三は織維にして綿密粗質如綿天鵝絨等に
 分つものです此れを鑑別致しませんと織糸の際繭類亂雜
 して解舒かいじよに不等を爲し節糸が出来ます第四は緊緩きんくわんにし
 して硬どか軟とを分けます第五尿着鏽惡服みくらやくしやうあくびつかくわいらんおせん敷潰爛汚染等
 を分けます此等は織糸方に不都合丈てはありません茶褐
 色の節糸が出来ますから最も能く注意し除かなかりませ
 ん拍手快と呼び又一酌々々一盃遂に酩酊酌止んで吃飯遂
 に肘を枕として睡を催し午睡々醒むれば下女蒲團を以て
 體を覆ひ居たり湯に入り一喫煙を吐て棋を圍み黑白大戦
 一敗一勝遂に旗を揚げずして一首の和歌に和し随分歡を

盡し歸れば午後六時々鳴刻尙進めりと袂より自ら出す袖
 時計も已に六時たれば疑はす此する内に晩くなりました
 旦那と呼て下女の出す酒と夕飯又吃飲して世上の談話を
 なす爲め團樂すれの隣室の浴客遊ひに來り又問ふ談の製
 糸の事なりき此頃世人の曰く糸質及び糸の細大等一定な
 らざる爲め大に糸の正價を落したり因て糸繰り器械を据
 付けよと其筋に居らるゝ人の御演談ですか如何でござりま
 すか承りたくありますと問ふ故に答て曰く尤も製糸器械
 の据付けぬはなりませんか小なる器械を据付けては却て
 失策と致す事う多くあります此れは第一に金に乏しき爲

製糸器械ニ付テノ
意見

め下等なる器械を持へて上等の糸を繰る事が出来ずと又
 金に乏しき故に繭の買入に困るに付け込み他にて競ふて
 繭を買入るれい自然高價のものを買ふ爲め利益の薄さに
 尙糸を賣捌くとき其相場も考へ待つ事出来さず爲め昨明
 治二十年の如きは却て損か立ちました殊に器械の悪しき
 故に糸屑か多く出来たり工女の充分に糸繰る事も出来さ
 れい愈々得失相償ひません此れに代つて大なる器械で
 株金でも多く募りて製絲致しますと繭も充分買入るゝ事
 が出来製絲も器械の上等に連れられ上等の糸か出来此賣
 捌くにも仲買商等の手を経ず直に英國なり米國に輸出す

る事か出来さず終に大に益か得られます斯くの如き次第
 なれい無暗に製絲器械を据へ付るも餘り好まじきものに
 ありません故に六十繰やら百人繰位は無理に勧めません
 併し此も急務であれば可成的拵へたくはあります然るに
 日本にては随分分業が開けません故に困たものです早く
 分業を開く爲め自家で婦女子に糸を繰らせる事を止め此
 等に織物を教へ製糸の必ず製絲場で繰り繭を作るもの即ち
 飼育製糸家の製糸織物家の織物と致したくあります御承
 知の通り分業に三つの益かおます第一時間をはぶくと
 第二其職業を大切にすると第三は修練の効を積むとです

と云へり容は御邪魔を致し大に益を得ました難有うと隣
 室に身を投すれり孤燈青色に書窓靜かに轉恍惚より旅の
 宿何にか思ふは吉郷の空復一杯を傾け寢所に身を托す而
 して其翌朝有馬を辭し直に西の宮に至り瀛車に搭し大坂
 に遊ぶ
 大坂に遊ぶの段
 緑なす柳の系になひかれて吹出す春の浪華瀾かたちもさ
 まも記し兼ねる中國筋の大都會此地を夙に開け行く生玉
 高津坐摩等の神社や佛閣城あどや巡りて至る天保山名こ
 そ高けれ山低く篠生入のみの土質なり斯くや巡りて川口

の舟の往き來を望むれり蝶や蜂やの芳草に羽打つ様に
 異ならず如何にも此地は昔より日本一の流通て貨物の輻
 湊する處ならんと其夜の中島に一夜の宿を假りにけり其
 翌日は府廳の農商科及び南北兩區役所の勸業科吏員に面
 謁して其土地の狀況を察するに養蠶術の必要大に感じ
 たる由にて我等に一條の演説を促されたり其夜中の島の
 常古屋にて開設する處の論旨は左の如きなり聽衆五百八
 十人餘外に別席に椅子によりたるもの二十一一人前にテ
 プルヲ掲へ其後に三辨士の演題を掲ぐ第一席に三郎壇上
 に登り製絲場建築法を説く製絲場は其製糸の目的により

相地法及坪數

て異なりと雖一の摸範を示せば同し事です故に百人繰を
 目的として御談申します此れに相應をしまして家屋の構造
 なり地面の廣狹なりも見計ひせなければなりませんか先
 つ第一着に其土地の適否を申し上げました運搬の便利な
 る處薪炭水利の適否衛生の如何又産繭物價傭工人情等の
 風俗も考へます事必要です次には土地は高燥に空氣の流
 通外周の清潔等も考へまして其坪數は二千坪もあれば此
 上もなき結好ですか左もなくも繭庫さへ他に設けますと
 千坪でも可ありです乍併先つ千八百坪位か通常かも知れ
 ません先つ充分地を取るとして概算致しますれば繭庫二

製絲場ハ平家造リ
ニ限ル

階附百五十坪繰絲場平家百二十坪工女部屋平屋百三十五
 坪繭庫二階附三十六坪事務所平屋四十四坪檢繰場平家十
 六坪蒸氣罐室平屋六坪撰繭所平屋二十坪水車場平屋六坪
 殺蠶室平家六坪職工部屋十坪薪炭小屋三十二坪便所五十
 五坪其他は適宜で御坐ります併し製絲場さへ平屋なれば
 其他は皆二階造りも致し又彼此兼用致しますれば坪數も
 減します製絲場は平家に限る譯は若し二階に人か上れば
 製絲に塵を落し上に繭を上くれば下より騰る水蒸氣の爲
 めに繭を失ふれば何にも用ゐる事出来ぬ故であります先
 私に此でと三郎壇を辭すれば太郎後に登りて私は御承知

附屬器械

の通り至つて兩辨でござります故に先やござら／＼致しませなれども少しば焉やうく諸君の御耳を拜借致します私者演題に掲げました通り製糸に關する事を彼是御談致します先つ製糸器と云ふは製糸に關する一切の器械でござりまして此に附屬致します蒸氣機鐘なり殺蛹器械なり水車なり貯繭籠なり彈力器なりデニール秤時計寒暖計天秤其他諸小器械は代價も大略定て居ますれば御談申せませんが釜類氣管水管等は其品によりて大なる差かあります極り安價は二千圓位なり一萬三四千圓乃至二萬圓も致しますものかあります假令へは鐵製木製半鐵製又繩管の如きも鐵葉鍛鐵

器械据付方

銅等の別もありますし其他時の相場もありますれば一口には申されません先つ此れて壇を退いて二郎次に登る私演説題は製糸の器械の構造と申しまして器械の拵へ方を演べます製糸器械には種々様々の事は先の辨士にも述べられた如く實に多くありますなれども其摸範の同一のものより取りたるてあります私の演説するものは器械と工女の後に据ゑる工女の前には机を備へ机上には五箇の鍋を設け其鍋は相馬燒瀬戸燒等に致しまして繭鍋繅糸鍋繭浸鍋蛹捨鍋水入鍋てあります線絲鍋の直徑一尺二寸許り繭煮鍋の五六寸と致しまして此の鍋の湯を取り替ますときは

螺旋ねぢを開閉し又蘭煮鍋の底には水孔を數多穿ち蘭の浮ぶ様します此机の下には二本の鐵管ありまして一は湯を通し一は水を通します其水管の下に樋ひを設け滴水てきを受け屋外に流します而して此机の高さは二尺六寸幅二尺長さは六尺十人或は五十人或は三十人適宜に聯續致して一人毎に二尺四寸の割合に當ります工女の後の製糸器械の高さは六尺にして下臺より二尺七寸位の處に大摺車おろしを設け此大摺車の爲めに絲いとと繰くる小棒は運轉す其小棒運轉の眞棒の大摺車より一尺位上にて此より又一尺上に手振りを附けて手振より八九寸前面上部に硝子釣しやうじつりに絲を掛けるです手振

りと申しますとは纒糸の棒に揚がる時糸の一處に集まらざるやうなしたるものにて其振數は小棒三回する毎に七度強を適當と致します小棒の位置は捻部の上に掛けたる釣より三尺二三寸を定度と致します此より短かきときは水分を多く含み長きに過れば糸の亂るゝことあります又大棒は何れにても周圍五尺二寸長さ一尺五寸五分と定まりてゐます而して小棒は定りてはゐませんか大略三尺四五寸の周圍です小棒回轉の數は上等の工女上等の蘭にて二條位なれば十分時間に千九百回三條位なれば千五百九十回と致します此れより速へなるも晚きも能くありませ

ん先此にてと壇上と下り閉會を告ぐればヒヤノノの聲雜
 沓さくに和なして鼓膜こまくを打は其翌日又大坂近傍の田舎に遊び木
 津難波つたなばを巡り遂に梅田うめだステーションに至りて後三時の瀛
 車にて西京に着す
 京都府下巡回の段
 桓武天皇くわんぶの其時より此京始まる云々といへは京名所も記
 せるものは音羽山ねのばの館しんに白糸しろいの嵐山あざなの櫻花尙は蕾つぼみにて笑
 はんと祇園ぎん清水しみずの公園と巡るも早はやき鴨河かひの河に架けたる
 荒神口あらしんぐち越ゆれば三條四條より五條の橋の上より望むれば
 山水かみづ明媚めいび光風こうふうも空に棚引霞かきりより香かしものは本願寺世々に

も名高き眞宗の元祖といへど此よりも八坂やつかの宮銀閣寺一
 層かさ愈よる金閣寺如何にも古き都にて今に規模きぼの残りしを思
 へは思ふなつかしく巡る追手おいてに淀路よどろやら伏見ふしの郷きの桃山ももやま
 はまた咲ぬ又間々二三日も巡りて至る宇治の園茶いんちの香かほは
 今に尙染地しよせんちもよろし鴨川かみがはの西陣さいじん織オリを取調とけの爲ために態々たいざい入り
 込こにけりさして高雄たかおは秋ならぬどきに二月の花よりもさ
 ひしきものは鞍馬山くらま天狗てんぐは何處いづこに去りしやら丹波路たんぱろ尋ぬ
 桂川かたがは近江路かたがはつとム宇治川の川瀬かがせに沿へて桑園さんえんも少しはあ
 れど迎むかひはや伏見ふし近くの田舎にて僅か一條の演説えんせつをなす
 其主趣しゅすいは此地より宇治に至りては古より名高き茶の

西陣織

名言てありまはすは皆様も御承知の通り我日本ては赤穂の
 鹽伊丹いんかの酒と並ひ稱らるゝ處てこさりますれば亦此上も
 なき結好な事でありまはす然るに此頃は流行どや何とか云
 て無暗鐵砲に桑を植ゑますが元來私共は桑を植ゑる事と
 勤むる者ではありまはすれとも茶園や桃畑も米も麥も鋤さ
 かへして桑を植ゆるは大不賛成です桑を植ゆるの處は田
 地の澤山なる處と荒地とか原野とかには宜しくありまはす
 基より茶は我國輸出品の上位を占めたるものなれば尙一
 層繁殖致させたま見込ですが又西京西陣織の如きは一層
 織物を改良して織出し可成生糸にて外國に輸出せざるや

う致したくありまはす又眞綿製造所も拜見致しまはしたか此も
 至極好き事ですなれども西陣織と當地近傍の茶は古來よ
 りの傳りであれは愈々増殖と勧めまはす決して他に方向を
 替へてはなりません何種物の流行するときは人の心も變
 り又上古の風説を聞くど如何にも益あるが如しと雖ども
 決して左様なものではありませんと演説終りて其日淀に
 出て高瀬舟に乗り込み近江路に向ひ遂に琵琶湖に出てし
 は翌日の事なりき

滋賀縣巡回の段

昔し此地は神武より人皇七代孝靈の御代に我國第一の美

蓉ようの山と此の海と與ともに出來しこと地理學學人ちりがくじんに疑
 の又周圍恰も七十五里年々歳々廣まりて中に澳あや沖の
 島時雨ときりきしげき多氣島たけしまより竹生の島をなかつ、渡る宇
 治川燈火いらぬ螢にて秋の片田の落ち雁の聲もあられど
 思ふまに日月は早く水の上に浮ぶ蒸氣の煙よりあられ今
 年の秋過ぎて比良山沈む白雪の如何にも我も竹外ちくがいににせ
 て一句を吟せんと空を見合す三井寺の鐘は入相つくく
 秋にあらぬと月白く石山寺に參詣しかへる湖上は舟輕く
 遂に長濱に上陸し湖邊を巡回するに桑田隨分多くして悦
 ぶに堪へたりと雖耕芸と肥料方に乏しきか桑葉黄色を帶

ひ土地瘠せたり而して長濱の縮緬と織出す地なれば最も
 蠶を飼育して其財料に充てざる可らざる又其飼育たる桑と一
 層注意して培養せざる可らざるを感し此長濱に於て桑の
 培養法を説かんとすと雖大急要用の旨國元より報導あり
 たるにつき二郎三郎の兩人の直に氣車に投して歸國し太
 郎の書生一人と鈴鹿山道すしかをなして伊勢に向ふ彼の有馬に
 て同道になりし兩人に彦根に逢ひ翌日大垣に向ふ此よ
 り此の漫遊紀事をなすに便からえめん爲め伊勢に向ふ者
 を甲組と名け大垣に向ひしを乙組と云ふ甲組は鈴鹿郡よ
 り河曲三重等の諸郡を巡回し宇治に至り内宮を拜し山田

に至り外宮に詣り遂に津に至つて製絲器械場を拜見し其夜此の津に泊すれり某製糸家の來訪ありて此頃少し糸の影況氣相を増せしもの如何かですると私共久しく巡回致しまして横濱の模様も承りませんか唯時事新聞にて一寸拜見しましたる昨日(明治廿一年二月廿二日)の相場は横濱にて秩父提四百六十七弗上州坐繰五百十五弗宇都宮生繰五百弗富岡提四百九十五弗桂田無印五百四十五弗信州七星器械六百二十弗信州俊明社器械六百〇五弗てござります成程左様でございますか御地の製糸器械を一度拜借に参り度と思へをり追々其儘に致してをります如何で

各種糸ノ相場

新舊兩器械ノ比較

す此頃に新器械とか何とか申して居りますか左様に新調器械と云ふ分けてはござりませんか御承知の通りの時事新報に前橋大渡製絲所に居らるゝ森田眞君か接続新案器械と普通器械との實驗比較を説明致しました御覽ありますと宜しくあります其文中の要項を抜萃致しますと左の如してござります(一)今回試験に供せし新器械の從來の舊器械に取着けたるにより鑊車の運轉蒸氣の沸湯等の毫も舊器械と異ならず(二)舊器械は客年新設せし百人繰にして此器械と雖も世間普通の器械とは其趣を異にし頗る簡便にして完備せしものと自信するなり(三)新器械の

四縷纜の裝置にしてケンナル仕掛あり舊器械は二縷纜にして其捻仕掛の裝置なり(四)繭は二種とも他の鍋にて煮たるものを一回に五合づゝを渡し工女自ら搜緒して繰製するなり(五)工手は二等の工女二名と以て新舊二器械に各四日間つゝ從事せしめたり(六)試験に供したる繭は上州沼田臺の小石丸並に一等品にして「デニール」は各平均十四とす(七)「デニール」の一総毎に二個所つゝを檢し強力の各十個所を以て檢せり(八)類節は檢尺器四百四毎に之れを檢し其總合數を平均せし數を掲ぐ(九)光澤は四週間中練製せし總數の絲を比較平均して二等に區別せり(十)新器械の技術簡

易なるにより工手に巧拙の差少なしと雖ども今従末の工手を以て新器械に従事せしめ舊器械と比較するに少しく權衡を失するなしとせず如何となれば舊器械の數年従事研究せしものにして新器械の僅々數回の就職に止まり經驗日淺けれなり故に此に此の子として今より數個月従事せしめたり後又於て比較するときは必ず今回の試験より新器械の便益一層を見るにたるへしなる程と三人同行料理店に至り酒と肴を命し互に親睦の情を結ひしは二十六日午後八時にこそ各愛を割て旅宿に歸り快樂夢を結び翌朝頭を上げれり已に九時半驚いて臥床を辭し腕車を命

し鳴海瀉とさして熱田に至る

美濃信濃兩國漫遊の段

乙組の大垣に着し車中桑園の模様を筆記し大野席田池田
不破等の諸郡を充分視察し岐阜に出で縮緬絹織等の織地
を檢し其機械等も大略備忘録に記し此の國の一圓物産に
富みて麻茶等も随分良品を出すか如し此より山と巡り峠
を越へて所謂木曾山中十八里を跋涉すれば音に名高き信
濃の國にて此木曾路の山間に何れも桑園を設け實に桑
樹の一世界と逃るか如し木曾川の鳥居峠の西を巡りて川
岸の村落の何れも棧を架して一社會をなすか如し此より

進んで諸製糸場あり桑園を矢鱈に馳せ回り或は質問或は
答へ此を記して備忘録の一冊をなせり此は後日活版に附
して故郷の友人と別たんとす斯く彼れに一泊此に二泊一
て遂に松本に出つ松本の所謂善光寺ある所にして随分盛
なる都會なり扱て當地養蠶家製絲家製種家等と訪ひ又彼
より來訪する等随分交際を求め兎や角やする間に幸ひ他
縣より巡回の折柄なれば明日は養蠶會を開き其夜は幻燈
會を開かんと有志の周旋にて遂に事と結び其夜も過し明
けぬれば早朝來訪する人もあり茶と煮て居る間三時已に
八時四十分に移ると以て會場に出つ出つれの會員六十八

蠶種貯藏法

名の多き彼此する内に九時十分に時刻移りたるを以て撃柝カチ／＼一同坐に就き會長を撰べは松井氏高點にて會長の席に居直り山本氏副會長となり林吉井の兩人に會長より書記を命じ我等の番外の席に着すれば會長唯今より討議を始めますと報しぬ五番問ふ蠶種を貯蓄するの極良法を二十一番立て答ふ此の貯藏につひては随分議論もあはる處なれり一體此迄支那なり日本人か貯藏せし法を餘り感心せざることあります何とぞかれの蠶種とても斷ず外氣を呼吸するものなるに箱に密閉するやうな事と致します尤桐の薄き箱なれり空氣も通ひます故に至極宜しくあり

蠶種貯藏器械

ます温度は零度迄も能く堪へます華氏三十五六度位にて寒を越します又別に方便を用ゐず唯塵煤煙等の蒙らざるやうする事を第一と致します寒中氷に浸するも浸さるも構ひませぬ餘り永く浸すと悪くあります故に此頃は浸さなくなりました而して蠶卵に全く微粒子なく清潔あるものは病蠶の基てあります卵面に何か微のあるもの病蠶です蠶卵の表面にのみ微粒子あるものは其儘貯へますれば自然に微粒子の寒冷の爲め冬中に死します此等の事を顯微鏡にて檢したれば室内に貯へ冬と經て春和の候になれば暖日の窓戸を閉塞し寒夜に開放して孵化せざるやう

營養作用

桑芽の發生と待ちます會長他も質問あれよ三十一番問ふ
 蠶體の諸器械は人間と同じ事なるや二十一番答ふ否然ら
 す第一骨なき故に蠶の軟體動物なり次に消化器械の比較
 的に丈けくあります八番答ふ尙腦の至て小にして脊髓神
 經の比較に大けい殊に前部に終るものは尙大けいが如く
 思ひます呼吸器の非常に盛です十三番一々圖に書いて説
 明願ひます誰れも立ものなきを以て會長番外に説明願ひ
 たしと番外答ふ此れは今晚幻燈に寫して説明と致します
 私は圖の至て拙てありますからと二十四番問ふ營養作用
 を簡短に説かれたし十九番答ふ蠶は其營養補給は人類と

桑ノ物質

桑ノ元質

同じく無機性よりも養分をなす其有機性の中の一は無
 窒素物即ち砂糖護膜質及び脂肪等一の含窒素物即蛋白質類
 てす乙は血液及び筋肉を生成致します甲は氣中の酸素を
 和して温と發します故に人は種々のものを食するに蠶は
 唯だ獨り水も飲ます米麥も食はす桑丈けてす此の桑に
 如何なる物質かあると云ふに大略乾燥物二五〇水分七五
 〇の割合ひ其乾燥物中に又蛋白質窒素等種々あります故
 ん桑さへ給すれの營養となりますなれども若し枯死の桑
 や培養不充分的桑等を與へますれば老蠶や稚蠶は其營養
 に自ら欠乏を告げます故に桑さへ一層注意致しますれば

決して子細ありません尙又委しく桑葉を分析致します
 れハ、硫酸、硫酸、磷酸、格魯兒、酸化鐵、石灰、苦土、加里、曹達等も含
 有して居ります其割合ひ等のことも一々説明いたしたき處
 なれどもうちこちするうち時已に十二時なるを以て晝飯と
 定め午后の都合により休會す午後半日晝會に臨み日を
 消し其夜幻燈會を開くに來觀人無慮七八百人先づ第一着
 に寫すは(あ)圖にして此レは蠶の全體を示し(い)は其呼吸器
 とて呼吸する處なり此れ恰も人類の口の如きか若し閉塞
 すれば忽ち斃るゝに至る此の氣孔を擴大にすれば則ち(2)
 の如くにして(い)の氣管(り)の氣管支なり次に寫す(3)は製糸

呼吸器

製絲腺

腺てあります(あ)に前部(b)に中部(c)は后部(d)は總管てす次
 に(4)の雄蛾の陰具にして其(一)は辜丸(二)は輸精管(三)は精囊
 四の射精管(五)陰莖(六)は副辜丸あり(5)の卵巢にして(一)は卵
 巢(二)は喇叭管(三)交尾管(四)は交尾門(五)は容精囊(六)は産卵門
 (七)は護謨門てす(6)は神經でありますして(一)は腦髓(二)の脊髓
 神經支でござります先づ此程幻燈に幻寫しますれば此よ
 り此等に就て演説を致しましやう此頃先の近頃と謂ても
 宜しきが理學とか衛生とか生理とか云ふやうな醫學が進
 んてまいりました故に動物生活法取も直さず生理學の御
 蔭にて餘程人は長命を保つ強壯に忍耐力を増し加ふるに

學校に於て體操科ありて無病壯健の人が多く職業は愉快に活潑に進む様なりました乍去蠶の生理とか病理とか又衛生とかは至て進みませぬ故に一層此等に注意致したもにて此等に注意と致さうと思ひますと第一に動物生理次に解剖學次に組織學即ち顯微鏡學を學びました後生理病理衛生を學ばなかりませぬ尙ほ此の蠶のみならず桑樹にも同じ順序を以て稽古を致さなかりませぬ此等の學問を一々端緒でも論じますと一ヶ年はかゝりますそこで一時か二時間の御談なれば何れも論ずることが出来ません故に空氣丈の事を一寸申しますなれども此も充分にはまいりま

せぬ爰に器械がありもせず且つ化學に亘ります故に細小なる處に又後日に扱て空氣は元來水素酸素の二物の成立でありまして窒素は至りて毒であります此窒素は不潔なる處等にありませれば炭酸と共に大毒ですが酸素と一定の分量を以て混合致しますれば却て動植物の生活を保ちます又酸素のみにてても餘り強くて毒ですか故に程能く混合になりてをります然るに芝居小屋又は密閉した室内に何れの人も酸素を吸ふて窒素を残し炭酸と口より呼出します故に遂に動物の吸ふ可き酸素なくなりて毒の氣許となります故遂に斃れます此れ人の集まる處や船中で氣

持が悪くなる故でありませす殊に蠶室の如き炭を焼かますれば此炭か目にかゝらぬ様なりましたのり皆其内にて炭酸に化してしまひましたのり若し之れを吸へば人の肺病蠶にのり氣管病即ち第一圖の(a)及び(b)の(c)等に病狀を發して遂に斃れるです依て新鮮の空氣を時々通はします斯の如く論じますと何れの處ても何れの國でも日々に此毒か積ると終りに地球上の動物も植物も皆死する筈に然らざる所以は一先つ此のやうに化合致しまして亦太陽の光線が分析して彼此配分都合よく致します故です今晚の時已に十一時にもなりました故に残念なから此でと閉會す

ればノウウ〜或はヒヤ〜

尾張三河兩國巡回の段

伊勢の國より乙組は熱田瀧にと蒸瀛を浮べ同處に着するや否や熱田の神社に參詣し残念なりら名古屋を見物せず鳴海絞を土産として買入れ又此地も巡回せず直に馬車に乗り或は車に乗り漸くにして參河に向ひ岡崎近在と漫遊し生絲木綿等の物産を調べ數日間日を消し岡崎市中を見物し矢矧を渡り過くるの時橋上一人の友人と邂逅す因て立談話すれば氏は基と八名郡郡役所に奉職し其後辭して製糸場に身を投せし旨を告ぐ而して邂逅のとい糶屋に宿を

桑樹病ノ原因及豫
防法

控へ此地に足を止め快樂に桑病を談ず桑の病には種々ありまして或ハ菌の生して桑樹を枯すもあり或は錆の生じて葉の縮むもあります何れも傳播する故に直に其患樹を掘り起し其處の土を取換へて之をいすすが宜し其原因ハ或る土中の病毒より來るもあり或は養分不足にして葉脈の管支充分緩伸する能はざるより葉の縮むものあります次に縮葉黃衰するものもありますさよハ何れも同じとて御座りますさて虫害は如何かですやいや此にハ私共の地方等には澤山あります先づ琵琶虫鐵砲虫心切虫虱類野蠶尺蠖其他色々多くあります尺蠖なるものハ十月上旬より

虫害及豫防法

尺蠖蠶

り發生致しまして桑葉の將に落とすとするとき大さ二三分位にあります寒中を凌ぎまして翌春發芽の頃八九分になりて蠶の四眠頃は二寸以上になります其後糸を吐き出し桑樹に倒下し其形狀棒の如くなります體中よりは數多の蛆蟲を生じまして羽化し蚊の如くなります其中ハ百中の一位は地下にて成繭しますれば又蛾に化して桑樹に卵を附けます此れを驅除するにハ其桑の葉の落とすととき取り去るがよし又萌芽の際之を捕へ殺すもよきものです虱は樹中に蜘蛛巢の如きものを作り息ます其形恰も傘狀の如くです此虫體小に僅に五厘許りありて吸收器ありて桑樹の液

虱類

を吸ひます故に桑の逆に枯れます此れは竹筥にて摩り落
すが宜しくあります其外色々手段もありますなる程く
どかたりて小宴を張り歡と盡し昔談をやらかゝ愛と割し
は翌日午前八時なりそれより腕車と馬車にて更るく遠
江國の勝地を探り秋葉山より天龍川の流に沿ひ諸方を漫
遊し三方原の廣原を檢し天龍川を渡り駿河の國に向ふ此
國の濱名湖の明應年間地震にて陥りし處なるが此湖邊に
は鹽を煮るものも充分ありと雖も未だ其事業の拙なるは
批評を免れざる所あり

駿甲漫遊の段

近江の大湖と我國雙美は富士山にして此山脈遠く亘り地
從て高峻なれば水流激勢駿馬の矢に附くが如く駿々止ま
ざる河多きを以て此國を駿河と稱けしか此富岳の麓を繞
り土地と巡回し清見瀧田子の浦三保の松原を徘徊し東北
に折れて甲斐の國と指し身延に至り鰍澤の澁を巡り巨麻
八代山梨の三郡を悉く視察し甲府に出て山梨縣勸業課に
至り某君の周旋にて地方の蠶業家及び織物家の門を叩き
蠶業の會話と開き大に益する處ありたり此より箱根を經
て二三日入浴し一先つ歸京の途に就き乙組も信州より前
橋に出で歸京の道に登りき恰も甲乙兩組とも神奈川縣金

子新町に會し織物會社と巡覽し再び横濱に下り下總に向
ふの心組なり

横濱の紀事

甲乙兩組都合六人にて横濱に遊び其由來及び市況を察す
抑も此の横濱の如何なる處なるやと尋ねれば安政六年迄
は至つて寂々唯一孤村の漁場でしたか開港地となりまし
てより一大變革即ち新に一港數町を拵へたです其始めに
は本町三町目に中井某とか云ふ人がありまして時勢の事
も知り前途の目的とも知り西洋風の商店を致しました此
時前橋の又造と云ふが生絲を佛國の「コレ」と云ふ人の

手代に一兩百五六十目で賣りました其後信州佐久郡上州
前橋勝山より賣拂ひ又續て信州上田松代奥州美濃の長濱
等より賣込むに從て外人の需用者も多く次第々々に系の
直段も登りました其後には英人佛人米人等競て買人れば
從ひ争ふて賣る事になり明治初年の頃には百匁に付十二
圓位の割にありましたが又困る事には貨幣の通用は國に
より異ありますれば此れを取替なければなりません此れ
を替るに其取替賃月々登りまして替手がなき爲め人足賃
迄高くありまして洋金を取扱ふ質屋連は壟斷を占め無茶
苦茶に上摺と致します故に賣主は非常の損を招き苦心苦

歩合ノ起リ

情の餘り奉行へ訴出で保護を致してもらふ事になりまして左様に致しませんと商人は斃れ出奔致します故でござりまするそこで其商買高の千分の五即ち千圓に付五圓の税を收むる事に決し其後明治十年に千分の三に下り今此の永續金と收め升す此れを歩合と申ます此頃の此の利潤が横濱で六七萬圓もありませんるやうな何んと大金ですと談ながら便船にて房州に渡り安房上總下總を漫遊し千葉市原郡郡役所の某と同行千葉縣勸業科員を訪ひ千葉町本町にて芝居小屋と借り桑の植付方及び養蠶の必用又ハ糸の賣捌法等を説けり然るに桑の植付方及び養蠶の必用は筆記せ

行絲賣捌法

ず生糸賣捌法のみを草して後日の用に供す然るに千葉市中の人よりは却て寒川黒砂檢見川村邊の人があつたりました飼女壇に登り私ハ中國の産でおまして自然言葉の御地と違ひ薄學不才のものでござりまする故に別けの分りぬ所は後より御問ひありたく存トます偕て御承知の通り彼此れ地方で製したる糸を小賣り致まして此れと仲買に賣り再び横濱の手を経て外國人に賣るものが多くありまするが横濱も仲買も何にも經ず製絲會社より直に外國に賣るのもあります其外國にも法にも其國々により異りますれども大約米國紐育と佛國里昂と英國龍動とです故に順次

米國ニ賣捌法

述べます我日本の横濱より米國の紐育に生系の荷物を輸送致しますと爲替金を其荷物に着けたる銀行の指定せし荷預り所の庫に積揚げ唯生系の見本丈を其紐育の支店に供へ置くか又は周旋屋へ運びまして購求者と待つてあります此れも直に金と品との摺替ではありませす多くは信用貸とて只口上の約束又は受取證位て三ヶ月位の後に金を請取るです萬一生系を送り日本商人に金子入用の時は此請取證を質入れ銀行にて前借し相應の利子を拂ふものてす併し手形貸しは手形と證據に取ります其他正金拂ひは至て少なくあります周旋屋は千圓の内五圓乃至十

英國へ賣捌方

圓位の手數を取るものてす其他店賃も出ます又輸出税とか海上保険料とか運賃とか藏敷とか人足とか荷物造りとか電信料とか領事檢印税と各種々費用が入るものです又佛國へ送りますのも亦同様の手續てござりますを少々は變て居れど別に多くは變て居ません又英國とても別に變つたことは無けれども此は何れの庫にでもあけず子ウトレイトとフエンチャイダストレートと云ふ處に庫がありまして東洋繭の糸へ悉く誰ても彼ても藏めます其取引も唯此庫に置たまゝ其所有の名前が變る丈ですと飼女には壇を下り更々る壇に登り實業教育の演説をなしたりし

十一時なりき此より梅松亭に至り一泊し翌日佐倉をさ
漫遊其翌日は水戸に赴き一泊の上亦地方を巡回し再び成
田^たに出て船橋市川鴻の臺を経て東京に出て兩國より川蒸
氣船にて千住^{せんじゅ}の大橋^{おほはし}に達し上陸すれば直に群馬埼玉椽木
の三縣を巡回するに決す

三縣遊歴の段

瀛笛ビエービエー煙は流れ車の飛ぶ鳥の如く勢力は龍が
天に翔^かけるか否の虎か碧竹^{へきちく}を破裂するの聲り忽ち浦和^{うらわ}に
着すれば此所の埼玉縣廳のある處にて從て師範校中學校も
あり殊に教育の随分盛大なるが如し其翌日は近在を徘徊^{はいかい}

微粒子毒

して茶園なり桑田なりを熟察し又其翌日群馬縣をさし
て行く行末樂し前橋や人智も高く高崎の東し南の平野に
は至る處ろ見る處土地は肥へたり桑繁^{しかり}世に名高き上州の
絹や生糸や種紙を織り出すものは此土あり然るに其夜余
に一條の演説を促す因て其演説を短簡に記すれば微粒子
西曆一千六百八十八年伊太里國に於て始めて發見致し其
後千六百九十三年に尤も猖獗^{しょうけつ}に流行し伊佛兩國に及び遂
に千八百六十四年には全歐洲となりました故に我日本國及
ひ支那に製種と求め漸く此を送り此を飼育致して今日養
蠶を致して居ります微粒子の所謂コンマバチーレンの如

微粒傳波ノ模様

きもの即ち寄生物の一種をして極めて單純の生活機能を
 有する植物性のものです其形狀階圓ていげんあるあり又小凸起と
 有し圓形なるもありて此を玻璃板上に安し又玻璃蓋にし
 て壓し少しく流動せしめますと微粒子は蠢乎しゆんことして動搖
 するものでござりまする微粒子は蠶種蛹蛾共に此病の害と蒙
 ります多くの蠶種の内容より此病に罹りましたなれども
 外來の刺戟しげき此れが原因を致します併しながら微粒子の蠶
 體氣管に侵入致しませぬ此に變て腸系腺腎脈血液生殖
 器きに隨分多くあります其蕃殖はんじやくするの時の蛹及蛾ようかの時が
 尤も甚たしくあります此時こそ注意せねばなりませ

日光山

ん先つ此れでと斯くの如く演説して其翌日は伊香保の温
 泉に入浴して其近傍の村落を漫遊し遂に古峯原神社こがほらじんじやに參
 詣し此れより日光に出つ此處に徳川公の廟所びやうじよありて金銀
 寶玉を以て宏壯こうそうある寺院を築きてありまして東洋第一の
 美觀みくわんです故に外國人の我國に來るもの一人として見物せ
 ざるものありませぬ此の外華嚴の瀧及たきひ中禪寺の湖を
 見まして宇都宮うつのみやに出ました此宇都宮の橡木縣廳さかきけんちやうのある所
 で御座りまして製糸場に臨みますれば隨分見事なる裝置
 でした此宮より橡木町近在の桑園が澤山ありまして養
 蠶家も多くあります而して午後二時發の瀛車に乗り込み

那須ノ原

二本松に着す其間那須の原の談をなす其筆記を示せば近
 來三島通庸君の開きし處多きが今六十七八戸の一村とな
 せり此を三島と稱へ「ステーション」のある處です此の三島
 村の西北に那須山火を噴き出し東方には所謂那須が原の
 砒石ありて殺生石と云ふ此原草を生する處あり或は畑と
 開きし處あり或は小樹の生する處あり而して地質悪くか
 らずと雖ども水利の便亦宜しからず故に那須川の水を引
 かざる可らず然れども葡萄又は茶或は桑を植ゑ以て葡萄
 酒を醸すか蠶を養ふに如かずと已に二本松に着するや雙
 松館に至り空線器械を見物し次に田村郡に向て出發し三

春邊と巡廻し會津に方向と轉し又東に向て福島に出て信
 達兩郡を徘徊す

奥羽巡廻第一の段

陸奥くの山邊の郷と昔より千里の如く思ひしに都て開く
 る道路なり鐵道の線を傳ふれば音に名高き仙臺なり其道
 筋の福島町より山形仙臺と二道に別る懸路には信夫の
 山と阿武隈の川の東方に葱摺今に名高き觀音は信夫の山
 と相向ひ此川筋や山の邊の麓に植ゆる桑の園至る處に叢
 々と畑の最中に養蠶や居住を兼ねたる木葉屋根の家は何
 れも二階附き如何にも良しや蠶室に窓や天井の開閉も自

由になしたる其ものをながめ回るは瀬上や飯坂庭坂湯の
 村の温泉遊に二三日と費やして桑折に出づる追手でに半
 田山巡れば銀鑛金屬や下りて東に走り行く郷は名高き上
 保原掛田梁川驛々の有名養蠶家を尋ねれば青年養蠶會な
 るあり通俗養蠶會あり何れも盛にして恰も好し青年養蠶
 會に臨みたり然るに余等に向て一條の演説をなせとの事
 因て承諾し一條の演説をなす其主趣諸君等は熱心にして
 我物産の第一位を占めたる養蠶なり國家の大基礎たる教
 育ありと能く研究せらるゝ實に感慨の至りなり然るに余
 往年此地に一度以來りて見る處桑園至る處蠶室なるに彼

此有志に就て質問すれば實地は如何にも長けて居らるゝ
 が唯遺傳法のみの如きを以て大に慨嘆致して居りました
 が此度は此に打て代て皆様方は學理を研究なされて實地
 と原理を能く符合せられ「ロソウ」的の進歩を見るに至り
 ました此は誠に悦ばしき事ですか又空理に走りて唯理論
 がましく言て古より傳はる老人の熟驗法と亂りに排撃
 してはなりませぬ一寸上つらを見ますと恰も學理は實地
 に實地は學理に齟齬するが如く見へる事があります此を
 譬へますれば羅紗は暖なりと考へると同じ事です若し此
 を信じて如何にも暖かなる故に身に纏へり善し然るに氷

と包むも解けざるの何故ぞ果して暖なれば解ける筈なり
 と言ひる、時此れ論理に協はぬなり然れども羅紗らしゃの不
 導物どうぶつにして夏の氷を解かさざるは光線こうせん空氣の通せぬ故に
 身を暖め體温を放散せぬとでありますと生理學なり理學
 なりを能く調べたるものは斯る語即ち羅紗が暖かと申し
 ませぬ若し唯一方のみを信じ居ると斯くの如くです故に
 互に實驗と學理を照らさざる可らず其學理も能く他を參
 照して致さねばなりませぬ如何んどあれば正面より一寸
 見ると理あるが如くにして裏面より見すれば害があるも
 のもありませんればなりと其他併せて學理的の事も長く演

せしと雖ども此を記せず斯く演説終て親睦の宴を開き又
 席上演説等もありて翌日は相馬そうま海濱かいひんに至り遂に西北をさ
 して仙臺に出んとする時相馬焼と檢し後日製系器械を据
 付け製系鍋の入用の者に紹介せんと約す已に仙臺に出つ
 れば東北の大都會にして高等中學校尋常中學校病院會社
 電信郵便其他諸官衙ありて第二の東京とも稱す可きなり
 先づ織物會社より製絲せん瀧たき釜かまと熟檢し其日も送り黃昏こうこん
 になりぬれば一泊をなし翌日直ちに鹽釜に瀧笛を通し彼
 の有名なる松島に遊ぶに小島浮遊三百餘悉く松と生して
 翠綠水影すゐりくせいに映し畫にも書にも盡す能はず又風流と云はん

か三景の第一位を占めるが如し就中富山扇溪の勝景譬ふるに由なし此れより金華山に登り石の巻の湊に臨み本吉もとよしの氣仙けせんの兩郡を巡り北上川に沿ふて陸中に出つ途上二泊盛岡に至る

奥羽巡回第二の段

盛岡は岩手縣廳のある處にして教育も随分盛なり然れども殖産の業未だ充分と云ふ可らず然るに海産山礦にも富める土地なれば將來の目的ハ豫期す可きなり就中縮緬は尤も上等のものト出す而して盛岡を辭するや江刺郡岩谷あさし堂どうより磐井郡いわい一の關いちのかみ膽澤郡にだん水澤等みづさわの近在を巡り水澤にて

某郡吏の紹介を以て顯微鏡使用の教授を乞ふ依て二日間足を止め語る皆さん御承知の通り顯微鏡の構造やら理學的光線の作用やら其用法やら「プレパラート」製法あり藥品の用の方やら別に随分稽古を致しますと二年間もかゝりますず然るに今二時間や三時間に一寸摘て御談申すにつき唯蠶卵の檢し方丈け申上げ升す顯微鏡の形ちは種々ありまするか蹄鐵様の脚上即ち「イ」の上に臺を圓孔の強さを程能く致しまするを穿てる三様の小圓筒と備へまして隨意に臺の圓孔を挿し入れる事が出來ます其下にある懸垂したる鏡へより反射しまする光線の強さ弱さを程能くします

るものです光線の強さを欲すれば小孔を臺の圓孔に臨ま
 します又弱きを欲するときは大孔に臨まします(ハ)の反照
 鏡は意の如く上下左右に動し又表裏自由に反覆する事か
 出來ます微粒子の如く光り強を要するときは鏡の凹みた
 る方を上方に用ゐるか宜しくあります臺の上には二重の
 圓筒ありまして外面にある圓筒(ニ)は臺の腕(ニ)に接して
 動きません其の内にある圓筒(ホ)と鏡筒とて外筒に由て上
 下自在に動かし得ます(ト)は接眼鏡であります(三)の不用の
 ときは抜きて別に置きます(チ)は接物鏡とて此を入用のど
 き又嵌めるものです此の兩鏡の加減では物體の幾倍にも

照されます故に或は五十鏡或は百鏡七百鏡と種々鏡を取
 りかへます一寸之を表に掲げますと左の如くです

接物鏡	接 眼 鏡			
	N1	N2	N3	N4
N.4.		七十倍	九十倍	百四十倍
N.7.		二百二十倍	三百廿倍	四百六十倍
N.8.		二百倍	四百廿倍	六百五十倍

顯微鏡用ひますのには玻璃戸になくして障子の前三四尺
 位内に据付け接眼鏡と接物鏡を挿めは懸垂したる鏡を斜
 めに能く其度を定め(ロ)板上に「プレパラート」と置き(ヌ)「プ
 レパラート」壓を以て動かさるやふなし其接眼鏡をさした

る(ホ)筒を左の手にて握り右の眼を當て右の手にて其の眼力に適するやう上下に回し度を定め充分見へたる頃りの螺旋を施し精密に度を定むるものと致します鏡筒の位置を定める時決して急いではなりません時としては玻璃を破る事があります以下明日亦御談し申します此にて止めんか其の翌日も至急用出来遂に其事と遂けず因て此の事は木村知治氏著す處の養蠶書并に蠶糸業全書等に詳てす故に能く御覽なされて質問の處に手紙を以て願いますと云ふ此の地を渡るや深山疊谷漸く三泊を要して陸奥の津輕郡と巡回し遂に青森に出づるに青森は人口一萬二千

餘縣廳のある處にて北海道函館を距る事僅か二十八里通船常に往來して北海に渡る要津なり此地は此の程非常に熱心して桑苗を福島縣渡邊氏より紹介して買入れたる桑は二萬三四千本なりと云ふ依て余輩に桑園仕付方を随分開かせ呉れと依頼せられしと雖ども時日限りあるを以て木村知治氏著す處の桑樹全書を數冊遺して此地を去る此より北海道を巡る可きの處都合にて直に南折して羽前の山形に歸り最上邊を巡回し遂に米澤に至り絲織器械を順覽し浮島が原に至り桑園を調べ十三峠と越へて越後に出んとする際米澤の南山蠶業熱心生より頻りに再び弊地に歸り

蠶系の化學的元質等と詳に説き呉れど云ふ態夫を以て照會に至りたるより限りある日限如何んともする能はざるにつき書面と以て答へたり其文に曰く態々態夫を以て御照會に相成り是非とも參上仕度候得共日限あるを以て乍本意越後へ越し候間折角の御照會の寸分に應せん爲め筆記を御送り申候間不惡御承諾被下度早々頓首蠶系の化學的抱合の理を究めんとするには先づ其内核と外包を區別せざる可らず内核ハ眞正の絲質「フ#プロイン」と名つくる者より成り外包は「セリ、マン」と名つくる膠質より成れり其他別に脂肪或は蠟質に類似する所の包皮ありて蠶繭の各

絲ノ化學的成份

層をして濕氣に侵されざる様防遮するの用をなすなり「フ#プロイン」ハ紡糸腺の後部に於て生成し其中央の肥大なる部に蓄積す恐らくは其部分膠質を分泌して蠶系の外包を構成するものなる可し紡糸質中部の含有物即ち紡糸質なり前面の織小ある部分に在る送輸溝中に押し出さるゝときは其狀恰も銀を以て中心とし金を以て外包とせる一片の鑢塊の延長されて一條長挺をなす者の如く「フ#プロイン」よりなる中核は絲の中心となし圓筒形の外包ハ蠶膠より成れるものなり此の蠶膠の用は各條の蠶系をして同一の送輸管を通過するの際に相膠合せしめ且つ蠶繭の層中

糸質ヲ溶解スルモ

に於ても糸條をして多少互に密合せしむるの用あり若し
脂肪腺より泌別せる液汁紡絲腺の送輸管中に流出して蠶
糸の表面に捺油すると以て非常に縝密なる膠合を妨ぐる
に非らざれば此の膠質の作用は遂に過度なるに至る可し
百ポンドの蠶糸中含有する所の物質の蠶絲質七五、二八蠶
膠質二四、一〇油狀及び蠟狀物の質〇、五〇色素〇、一二なり
而して此膠質の多きに過くるものを去るに石鹼水或の
灰滷水なる可し然れども又悉く去る時の糸の用をなさぬ
故に能く注意すへき事あり

越後の紀事

中國邊の桃花水暖にして輕舟と浮ぶの好春にも近かんと
するを十三峠とい世にも名高き深山の峠にて此日の殊更
陰天なれば松吹く風の凄しさ身も戰ひ袖打つ霧に凍る心
さへ冷やかに呻吟するのまに／＼積る雪も三四尺何處も
知らぬ白たへの雪の最中につく／＼と考へるまに晩れの
鐘思へば悲なれ樵の實の獨り旅路にはあらね共さして行
く蒲原の郡の大けい越後半はに亘る大郡にして誰れ知ら
ぬものなき信濃川は此の新潟港にと注ぎける港の日本五
港の一にして北海の樞要たり此地一度び過る明治の二年
に交易場と定めしより街市繁盛港内濶く巨船商船帆前船

を泊し内外の通商愈々盛にして縣廳あり病院あり學校あり會社あり殊に越後の美人とて世にも傳ふる處あるか陽貴妃も三舎を避け小野の小町も及ぬ美人の三五二八の樣貌に金銀を裝ひ風手媚々袂と引き長袖を以て人を招き粉紅を飛すものは娼妓か藝妓か否な馬鹿か畜類か身を賣るの業女なり嗚呼開明の世に何物を天の無祿の民を生せざる可し然るに越後の國の此のみならず蒲原より福島其他諸國に寄留して娼妓の席に加はるもの幾千萬人ぞ實に驚り可し此より北陸諸道を巡回せんとするの處時日切迫するを以て直に歸途に就く其途次新發田に一泊して演説と

なす其大意此國の寒國ではありますれども礦物には富みて居りまして殊に布類越後縮五線平柄尾紬などは有名でござりまして世上の需用も多くあります故に此より一層此れ等の職に就事して濫りに婦人たちを他國に出さるやう致し度くあります就ては蠶業も勵み其元素たる桑と増々盛に上手に仕立る法と考へなければなりません此頃は少しも絹類を製したる事のなき所さへ大に熱心して居りますれは此の地の如く昔より手順も付き土地柄も桑なり養蠶に適する處なれば能々其の業を盛にせられん事を希望致します殊に此に近在の地勢平坦にして田畑大に開

け川流運送の便くわんれん漕の利一として良しからざるはなし
 然らば教育の如きも又注意して活潑有爲の人物を拵へ土
 地の爲めに社會の爲めに實業と智識を併進せねりありま
 せぬ若しも兒童の教育を誤りてなほざりに付しますと父
 兄たるもの、義務もなく追々世が開けるに従ひ世間の人
 うリニウ惻憐になるに獨り此の邊のもの許り退歩では十人並の
 交際が出来ず故に遂には子供連が大きくなりて父母と
 らむです今の教育の昔の寺子屋ではありませぬ何んでも
 讀書算術位の世渡りの道具に用ゐまして其の目的は社會
 に益我が爲めに徳と取る手段です就ては困難でも堪忍に

して授業料の基より寄附金なり補助費なり出して眞教師
 と雇ひなかりません若しも今困難故に教育と放任す等の
 事を致すは一家の主人極大病に陥りたるに金の入用を厭
 ふて藥を與へざると同様です餘り長くは失禮故に先づ之
 れでどの聲に應じて衆員ヒヤ／＼ノ／＼の聲なり頓首
 々々此れより愈々故郷に歸れば書面山の如く家内一統悦
 びに堪へず先づ入浴して晚餐終り積もる談しも調ひにけ
 る

摘桑妹を招くの段

摘桑故郷に歸れば妻の御歸へり三才の童子の手をつさね

とつちやん御かへりと最愛らしき聲にて目もとうるはし
 く云へば摘桑氏にはウン／＼と頭を下け草盤と帽子を携
 へ揚々然として歩々足を引きつゝ奥の坐敷に通しなば妻
 子の後より續いて至り積もる談も手紙も山程あれども先
 の御湯と小兒と共に入浴して晚餐を食し悉く手書を開封
 して返辭は明日と長の旅路に勞れた故寢所に就き積もる
 談も寢て解けるとやう兩人の中に小兒一人と川の字に摘
 桑に眼瞼相合せんとすれども妻君には彼此談もあれば
 眠らさず巳に午前一時になりぬれば水も漏さぬ寝いささ
 へ高く安眠するまゝに其翌日妻君は寢所を辭し彼此朝飯

も調へ小兒をして摘桑氏を起さしむるに罪なき愛子はお
 とつちやんと手を以て顔を按すれば忽ち眠り寤め起き
 嗽し朝飯と吃し彼此する間に隣人も多く來れば此れにも
 對面して時巳に十一時に至れり然るに妻君に且那寫眞
 を拜見致したくありますエー何妻君曰く旅路も永く其日
 は徒然でありましただろう併し世間にと随分美婦人も多
 く殊に上方には別嬪も多くありませう風のたよりに承り
 ました其別嬪の寫眞を口説を云ふより摘桑君にハテ
 何やうと考へ常談はさておき書面を悉く繕き尋ねるも妹
 の手紙は更になきにつき不思議に堪へずして妻に向云ふ

御前に言はなければさうぬ事がある余れも御前の知て居る通り但馬より流れ込たるものだが此度の巡回にて始めて妹に逢ふたか其談は緩るくくと何ぞ手紙が來あかつたかど問へば妻君微笑して曰く成る程妹さんでござりましたよう此の談を承りて居ました故寫眞いと申しました其妹さんの寫眞を拜見致したくあります然らば御手紙を出してまけ申しますと妻の一概に瀝ふ權のかど此れ無理ならず兎や角する間に十二時の時計ブン／＼晝飯を食しなから摘桑君には涙を流す妻君増々不思議に堪へず嘸ど戀しくありませうと妹よりの假名文を出し能く御覽あれど

妻君は如何にも權的の艶文と思ひ居るに摘桑君に如何にも左もある事と其書面を開き漸く昨日歸國したり依て不日迎ひに參ると返辭を認め出し五六日間過れば車聲がラ／＼障子と開き伺へば妹と老婦一人従ふて來る摘桑君に大いに喜び早々坐敷に通すに妻君の口上には能く御出になりました嘸御厭でしようと縷々語るも腹中は此れは權的に愈々極まつた年は三五に二春を加へ海棠か櫻か否山吹か色香も花に劣らぬ者なれば胸中穩ならず先一坐に團樂すれば漸く眞の妹に相違はなき事明了にて茶菓と出し飯と調へ緩ゆる／＼談をなすに決し此れより妹の身の

上に就て物語り製絲場に學ひしむるの段にこそ

摘桑氏妻君摘桑君の妹と物語りの段

入相の鐘は汀にうつ水の音より悲い松風の琴を弾して月
見どの心も空に浮び行く憐も遠く桂男の舎す浮世のあだ
櫻咲て春過く佛坐草花萱草の花と色くらべ赤と紫の入り
混り夜も静かある青焰に映つるは毛氈の影にこそ上に並
べる爛徳利火鉢の側に茶の道具並べて語る昔より兄に分
れた其時は尙人様の乳をのみ幼き時よりたらちねの母の
顔をばつゆ知らず唯兄をのみ傳にと思へど兄も何時しか
に行末も知れぬ昨日迄互に尋ね月日をば十三四年の久し

きに其間は他人の御世話になり誠に氣の毒千萬にも其の
働さなく氣兼ね申すにも申されませぬ夫れも人様の御世
話になるも確とした父どか兄どかがあれをいかも人様も
御安心ですか何を言ても何處の馬の骨やら知れぬ妾し
とて涙の顔をかくす妻君にも嘸ぞ左様でござりましうだ
ろいと言語を盡すまゝ八日の夜の月なれども巳に西山に入
りにけると共に鶏は啼にうたふより各寝所に就き翌日老
婦人と車夫と手土産を齎らし歸園と命したり其の後數日を
經て製絲場に絲繰る業にやうんとする折妻君の曰く他所
でのみ情の風吹くものか此處にも兄はあるものなせ

袖搾り春雨の凄しき郷に行かるとぞ妾とても妹もなくして談相手にも困るの時恰も良しや何とか一二年丈にても居られ玉へよ以上は摘桑君家に居る書生の記す處なり

摘桑高木等漫遊連集會の段

漫遊連集會して談す此度の漫遊は随分面白い處もおもしろたが又苦しい處もありましたと甲言へば乙答てさやう随分長の旅路でこわくありまして又おかしき處もありましたと互に其方言を以て談するは妙々奇々珍たり而して桑の世界の事は始めに一寸書き記して其所在も別りましたか此筆記を他人に見せますと糸世界なり蠶の世界は何處か不判然

なりと云ふ所あれば恐れながら説明と致して此有様と活版ばんに致し世人に示さんと思ひます如何かど何程糸の世界や蠶の世界は別に何れども指定は致しませんが我等か巡回した處か即ち其世界ですから別に詳論するには及びませんなれども一寸記すであります糸の世界は東は繭國に接近し西は織物屋を経て人身國に直接するなり北は太物たぶつ世界南は眞綿洋に隣りして工女なり生糸問屋等の住居する所次に蠶の世界か蠶卵州に直接して簇海を隔て蝦州と相交り殆んど境界を分たず其世界に内職州蠶病州上簇州も蠶州を分ちて又此を細別して初眠郡二眠郡等となす

然れとも以上の三世界の恰も仙郷の如く愉快に活潑に學
 動をなせば愈々愉快に又活潑に赴き意氣沸々として中止
 する處を知らずと雖ども若し愚夫愚人が不活潑の處業を
 あして前後も顧みざれば忽ち世界外に陥没して身に大害
 を蒙るある可し此れ恰も夢の如く談して居る間に檐打つ
 風の葱ふ草藁屋にわらす板屋葺千々の雀の聲絶へて煙り
 とかひる夕暮の風鈴の音も萎るゝ葱ふの影垣根の竹も斑
 なし焦けるは赭と黒との色火鉢の側に身と置きなかつ此
 れの夢めか否な何れの世界の事かと夜の既に三更々重ね
 て四方の草木も共眠り瀕の聲もゴウ〜と朦月夜になが

むる空の心地の下這ふ篠の節の間も眠らぬ暇に明け鳥東
 の方は雲紅く草の露さへ赤の玉となりぬるものも旭にて
 消ゆるやあはれと夢醒て愉快に書さし筆の先き此れより
 外國の巡回の段に及び愈々奇々妙々に筆を回して實業を
 人に知らさしむる巻は次の日に遺すと獲麟す

通桑蠶絲世界旅行記 大尾

明治廿一年五月五日印刷
明治廿一年五月七日出版

廿一日

定價金五十錢

版權所有



著者

木村知治

福島縣信夫郡瀬ノ上村
七十七番地寄留

發行者

萱間左右太

福島縣平民
信夫郡福島町十二丁目
四拾六番地

印刷人

橘磯吉

三重縣平民
京橋區弓町廿四番地
耕文社

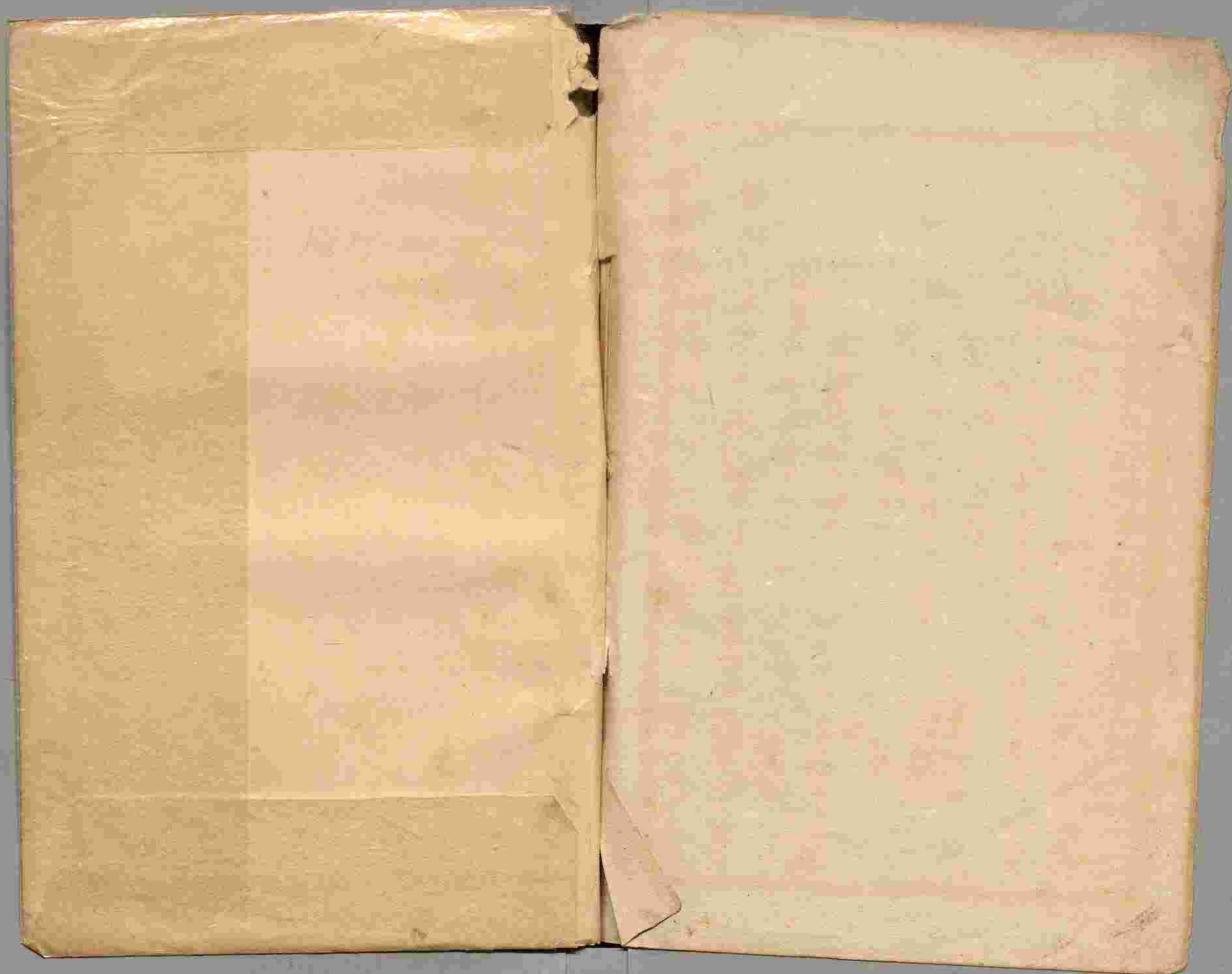


特 別 賣 捌 所

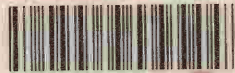
東京日本橋區通二丁目
 丸善商社洋書店
 全 通四丁目
 牧野善兵衛
 全
 和田篤太郎
 全 通二丁目
 大倉孫兵衛
 全 若松町
 榑原友吉
 全 磯山町
 辻岡文助
 相州伊勢原
 山田淺次郎
 岐阜縣岐阜米屋町
 三浦源助
 福島縣福島町五丁目
 上野屋彦太郎
 全 七丁目
 樽向堂
 福島縣福島南區
 石川支店
 伊達郡梁川
 齋田宗兵衛

全 桑折
 仙臺屋半七
 安達郡二本松
 七島武兵衛
 安積郡山
 富屋久之丞
 岩瀬郡須賀川
 寶來屋富藏
 信州松本
 水琴堂為吉
 越後三條
 樋口小左衛門
 靜岡吳服町
 三浦定吉
 仙臺園分町
 伊勢安右衛門
 大坂本町四丁目
 岡島真七
 名古屋本町三丁目
 川瀨代助
 磐城國平町三丁目
 清水屋甚太郎
 全上ノ上十丁目
 淺野利七
 山形七日町
 八文字屋多有衛門

引



群馬県立図書館



0496062-1